

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和八年三月一日発行(毎月一回一日発行)
第二十四卷 第十二号(通卷二八八号)

万象

B A N S Y O

三
月
号

2026. 3



三月の句

三月の日記びつしり生きること

中山純子

中山純子先生の第四句集「華壁」の一句です。

「びつしり」の一語に込められた純子先生の生きる姿勢に、思わず襟を正す思いがしました。

題名の「華壁」、母上への供養の思いで命名されました。結婚、二児の出産、父上と御主人を相次いで見送るといふ、人生の充実と激変を集約したような切実な体験が、俳句という形式をもって作品として揺るがないものに昇華している。

「先ず感じるのは、積極的な生活感覚と強い現実感である。一口に言えば生きる意志である」と、沢木欣一師の序にあります。

(道場啓子)

令和八年

三月号

万象

BANSYO

子どものころから半分大人みたいで、
大人になってからは
子どもっぽいところが抜けないのです。
ですから今でも大人の価値観のなかに
理解できないものがあります。

フランソワーズ・サガン

万 象

令和8年3月号

主宰作品 御 慶 江見 悦子 4

万象の窓④ 句集のすすめ 江見 悦子 5

名誉顧問作品 花びら餅 小林 愛子 6

風音集

..... 中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・中條 睦子
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子
榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子 7

風音散歩④(三月号) 小林 愛子 10

同人作品

江見悦子選 11

同人作品の佳句 江見悦子選 31

同人会だより

「万象」オンライン同人句会の参加者募集 万象同人会 32

1月の「万象」オンライン同人句会高句

会計からの連絡 万象俳句会会計・同人会会計 33

佳句佳句しかじか 同人作品鑑賞(一月号) 前田貴美子 34

冬晴の海 大橋 雅子 36

大鳥居 中川 雅月 37

同人特別作品

特別作品評（二月号）

 荻野加壽子 38

私のこの一句

 山本 右近・伊藤美音子・佐藤 和子 39

続・風のしをり^⑳ 子規の写生論の展開（四）

 高木良多

 編集部 40

万葉の抒情^㉑ 『万葉集』にたずねる抒情の源流^㉒

 橋本 清 41

万象ノオト「リモコン」

 松井 宣夫・安藤美酒々・入河 大河
 久留島規子・中澤 祐一・美山 留唯 42

巻頭作家（二月号）プロフィール 村田由美子（柏）

 内田 郁代 44

万象作品 江見悦子 選

 45

珈琲ぶれいく^㉓

 55

万象作品の佳句

 江見 悦子 56

北から南から 「浦和句会」今昔ものがたり（埼玉）

 中村 千久 58

ルビーの小函（三月号）

 編集部・校正担当 59

東西南北

 60

御慶

江見悦子

(主幸)

相槌も五回目根深汁たつぷり
冬泉を分かつや鯉の黒き背
ひるげ時港に熱きねぎま汁
アロエ咲く番屋の裏の供養塔
歳晩や舳先にそろふ大漁旗
潮風の夜つびて荒ぶ年の果
父の丈はるかに超えて御慶かな

句集のすすめ

江 見 悦 子

松の内の7日、「万象」顧問柳澤宗正さんの句集「遠富士」が届きました。手に取って、古雅な装丁に感じ入りました。厚い和紙の帯の手触り、版画を思わせる雪富士の絵のカバー、古武士を思わせる味わいにお人柄が滲んでいるようでした。米寿記念に上梓なさったとのこと、20数年にわたる句の数々は「俳句で綴る我が後半生」の記録」とご本人が述べておられるように自分史とも言ふべきものです。

「万象」では平成14年の創刊以来、90冊近い句集が刊行されており、約80%が第一句集です。その67冊には、ご夫婦で出されたもの、写真や紀行文と一緒に句をまとめたもの、或いはご逝去のあとと親しかった人の手による遺句集もあります。

あとがきを読むと、何かの記念に、友人からの刺激で、自分のこれまでを振り返るために等々、様々な動機が記されています。私も第一、第二と2冊出版しましたが、振り返ってみると、句集作成の醍醐味は三つあると思います。

- ・自選の楽しみ 過去の沢山の句の中からこれと思う句を抜き出す楽しみ
- ・全体デザインを考える楽しみ 構成、装丁、あとがき等、相談もしながら
- ・完成して皆さんからの感想、批評、鑑賞等を受け取る楽しみ

時間とお金がかかりますが、改めて自分の句と向き合い、今までとこれからを考えてみる時間をもつことが、人生の句読点にもなるのではと思うのです。年次も体裁も関係ありません。好きな形の句集を考えてみて下さい。いつでも相談のりりますよ。

最後に細見綾子先生の第五句集「伎藝天」のあとがきを紹介します。

「四十年あまり俳句を作ってきたが、それが何であったかを考える。「針の穴から天のぞく」という言葉があるが、自分にとって俳句は「針の穴」である。俳句そのものの持っている作用・業をしきりに思う。」(昭和49年9月)

花びら餅

小林 愛子

(名譽顧問)

ホバリング長し小虫の冬日向
墓は今さくら落葉の日溜りに
いちづなる冬の泉の響きかな
冬至南瓜ごろりと影の生まれたる
晩年に受く初雪の二た三ひら
藍色の染めむらの雲冬ふかむ
生き得たりうすがみを解く花びら餅

古寺巡礼

中村千久

(編集人)

梅一輪

柳澤宗正

(顧問)

春日大社大破

形代に折りて吹きぬ白き息

長谷寺修正会 二句

節太き悴む指に印結ぶ

護摩壇の火のしづかなる淑気かな

浄らなる風花降り来古寺巡礼

夕映えの沼枯蓮の乱反射

白杖の音ひびかせて寒日和

年はじめ

福島せいぎ

(顧問)

七日粥

中條睦子

(同人会会長)

言祝ぎて三番叟舞ふ年はじめ

囃されてえびす飛び出す箱廻し

台湾の友と酒酌み年惜しむ

百歳の大きなこゑの初電話

オリオンは輝き熊は歩き出す

奥祖谷の闇に荒星降りそそぐ

法灯を継ぐや形見のちゃんちゃんこ

偕老の相方欠けて初日受く

あらたまの風突つ切つて鶉の声

強風に背を押されゆく初戎

七日粥吹いて常着の家族有り

乗り出して歌留多取る子の髪にほふ

初 夢

松原智津子

(北海道)

お正月忘るる程の年重ね
振袖の樟脳匂ふ御慶かな
初夢の父は吾より若かりき
読初に選びし子規の俳句稿
人込みに紛れ初売控へ目に

霜の夜

亀田やす子

(栃木)

黒雲の帯押し上げて初日かな
あらたまの野に白鷺の降り立ちぬ
よべの雪明けの野山のうす化粧
重たさうな満月の浮く三日かな
富士の絵の句集を開く霜の夜

初 社

沢辺たけし

(千葉)

込み合へど馬券売場の寒さかな
公園のバスケのゴール木の葉雨
日溜りの冬蝶小さき風となる
初社日はやはらかく木々を透き
玄関へ破魔矢の鈴の弾む音

宮参り

吉中愛子

(東京)

神宮の森の深さや雪椿
宮参りきらきら上がる冬の雨
初太鼓高く掲ぐる桴二本
散りざまに立ち凍りたる葉いろ
輪飾りを樟千年の瘤にかな

冬木立

榎本文代

(神奈川)

途切れたる会話湯豆腐ゆらぎたり
北風に押されて来り怒り肩
蓋を開けピアノノ黒鍵淑氣満つ
四日かな煮物に入れる爛ざまし
チェンソーの音俄かなる冬木立

曾我寺

神田美穂子

(静岡)

川べりに無住寺ひとつ笹子鳴く
冬の鴟曾我の土俵に声刺さる
冬日影五郎の首級洗ひし井
木守りとなるべき柿の二つ三つ
無住寺に上ぐる賽銭十二月

虎落笛

井村和子

(石川)

虎落笛駆込み寺へ猫走る
半盲てふ一語を胸に年送る
行き帰り百の磴踏み初詣
地上地下三度乗り継ぎ達磨市
古九谷のみどりの余韻初茶の湯

「ぼかん」

前田貴美子

(沖縄)

鷹晴へ鳴る縄文のささ流れ
冬蝶へ日ざしこぼせるほどの風
後ろ姿ばかり枯野の日溜りは
巾箱本旅のマントの懐に
抜歯二本ぼかんと冬の大入り日

風音散步

④〇 (三月号)

小林愛子

鏡餅開くや富岳晴れ渡る 柳澤宗正

正月十一日の鏡開き。鏡餅を食すのに刃物で切ることを忌み、手や槌で割り「開く」とし、運勢の開けることを祈る。

作者は新年早々、米寿を記念して句集「遠富士」を上梓した。それによると、14階建のマンスションの最上階に住んで箱根の山々と丹沢山塊を従えた遠富士を慈しんでいる。

句は大らかでリズムカルである。「ア」音が8回繰り返されたのも明るさに繋がり、目出度さと格調をもたらしした。

四日かな煮物に入れる爛ざまし 榎本文代

これまで、正月四日を仕事始めとするところが多かった。しかし、最近は多様化して世間の常識は変わりつつある。

掲句は正月の三日間、今まで通り家族が集まって賑わった。なにしろ爛ざましである、男性陣の勇姿が目には浮かぶ。四日の家庭料理にその爛ざましがたっぷり使われた、煮物は特級酒に限るのだ。昔から、厨房を預かる者の知恵である。

無住寺に上ぐる賽銭十二月 神田美穂子

陽暦の十二月。日ごとに寒さが加わり、草木は枯れ、蕭条とした景。街はクリスマスや歳末を迎える人たちが賑わう。

この国は、老齡化や人口減少で村などから無住寺が増えていく。檀家が減少、または消えたのである。句は「無住寺に上ぐる賽銭」と冷静な描写。無住寺と知りながら、賽銭を上げてお参りする人に、季語の月名はかなうようだ。

虎落笛駆込み寺へ猫走る 井村和子

「駆込み寺」は、縁切寺とも言い、夫の不身持や強制結婚に苦しんで駆け込んだ女性を助け、前夫やその他に異議を言わせない特権を持つ寺。鎌倉の東慶寺などが知られている。風が笛のような音を立てて吹く日、気配にさせては女性か？と見れば走り去る猫。強烈な意外性、その冷めた目が面白い。

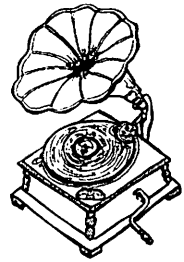
込み合へど馬券売場の寒さかな 沢辺たけし

近代競馬は横浜で外国人により行われたのが始まり、現在では競馬法により配当金を支払うギャンブル的娯楽となった。句の「混み合へど」は、馬券売場には勝ち馬予想に殺到する熱気がある筈なのに、という軽い違和感であろうか。寒い日ではあったが、別の寒さも感じたのかも知れない。

振袖の樟脳匂ふ御慶かな 松原智津子

「御慶」は新年にお互いに述べあう祝辞。普段親しみ馴れた間柄でも御慶だけは改まって行うところがおもしろい。その御慶のお相手が振袖姿の女性であった。丁寧に仕舞われていた振袖に違いない。晴れ姿から微かに匂う樟脳の香りも特別の日ならではのもの、慇懃でユーモアあふれる。

同人作品



江見悦子選

札幌 岡本 敬子

ほたたと出汁のしみたる煮大根
冬の日へガラス素通し昇降機
尾根雪の落つる轟音闇ふかし
バトルの跡庭に残して冬の禽
木豎豆の莢揺れに揺れ年暮るる

札幌 林 陽子

手の窪に賜ふ冷たき龍神水
はらからと冬日寂しき納骨堂
正信偈唱ふる御堂底冷えす
脳検査終へて吹雪の街ひとり
どか雪や始発電車の動き出す

札幌 落合 裕子

冬紅葉散りぎは色を深うせり
地平線ぐるりと明き冬夕焼
吹かれぬる合歓の枯実の軽さかな
夜明け前カーテンもるる雪明り
重たくも水色美しき湿り雪

札幌 濱谷 和代

灯明の炎の揺らぎ隙間風

影といふ影長くなる冬至の日
ひもすがら小春日和の海碧し
単線の車窓の明かり冬銀河
枕寄せ神話の絵本冴ゆる夜

札幌 大内 和 憲

みちのくの水の匂ひや新走り
胃瘵食の袋一つやクリスマス
氷片をたたき干し物とり込めり
五体みな雪の匂ひやランドセル
清拭の腕にタトゥーや冬ざるる

札幌 紅 露 恵 子

小春日や柴犬の尾の左巻
切株の洞に落葉のたつぷりと
初雪は荒ぶる風を引き連れて
気嵐の去りゆく湾のしづけさよ
一刷毛の薄墨の雲暮早し

札幌 大内 マキ子

口深く裂けし乾鮭吊るさるる
十勝野の風紋荒き雪野原
棟上げの槌音高し寒日和

教会の昼しんかんと冬木の芽
冬北斗傾ぐ酒蔵風冴ゆる

札幌 中 鉢 弘 一

雨後の路象嵌のごと濡れ落葉
冬景色木々の枝みな無彩色
檜葉の実に集ふ狭庭の寒雀
森に入る歩くスキーの二筋に
合歓の木の花そのままに年越せり

札幌 北 浦 詩 子

玉霰にはかに窓のにぎにぎし
一筋の足跡庭に雪の朝
床きしむ渡り廊下の底冷ゆる
胸元にほのかに残る柚子湯の香
古暦良きも悪しきも過ぎしこと

江別 佐 藤 哲

凍晴に刺されて深き森出づる
雪を漕ぐ背に力あり孕み牛
廃線の枕木の果て海凍つる
山の湖さざ波のまま凍てにけり
新しきルンペンストープ廃駅に

江別 太田 佳美

雪二寸とことことつこ庭雀
最終便冬満月は雲の上
電飾の点灯式や冬に入る
煤払ひ考の歳時記布表紙
櫛紅葉しかと貼り付く煉瓦徑

新潟 高橋 ひろ

この徑も又行き止まりなる枯野
冬菊とおつつかつつの年格好
極月や納骨の日は雨となり
食べさせた物こまごまと古日記
冬の雷白き光となりて落つ

新潟 高野 松風

片足は河口に立ちぬしぐれ虹
川かみに弥彦嶺泛ぶ冬日かな
冬日浴び指なぞりある時刻表
稽田の隅に傾げる猫車
近づけば離るる鳴の間合かな

益子 光岡 れい子

忠敬橋たもと黄菊のにほやかに

枝撓るほど柿熟るる無住かな
牡蠣焼けばじゆわりとこぼれ安房の潮
家家の垣は山茶花里日和
キーウイを煮つむる時間暮早し

芳賀 大村 かし子

百頭の牛舎全開小春の日
冬うらら一人の小昼豆大福
新海苔の香に包まるる朝餉かな
実南天活けて卒寿を迎へたり
砲弾宇都宮大空襲から八十年の傷跡残る銀杏散る

宇都宮 阿久津 勝利

独り居に有り余りたる冬日向
木枯や軋む廊下の釘隠し
熱爛や赤提灯のカウンター
竹林の小徑を抜けて雁の空
吟行会果てて別れの冬夕焼

栃木 上岡 佳子

音たのし大股小股に落葉道
オリオンを過る明滅一機かな
デイサーピスの車徐行や白鳥湖

日記買ふ人に並ぶやセルフレジ
初氷羽毛閉ぢ込む手水鉢

佐野 増田 幸子

表裏みせゆつくりと朴葉散る
冬菊の丈より長き影となり
冬日影庭師の指のせはしなく
枯芙蓉根元に一花紅ひらき
篋の高きに鳴くや冬の鶉

佐野 加藤 季代

冴ゆる夜や空に白鳥熊もゐて
反骨や遠く離れて浮寝鳥
白衣観音抱ける山の眠りけり
空といふ無限の器風花す
風花は宇宙の塵かかくも降り

佐野 阿部 澄

枯蘆原裾より暮るる迅さかな
隠居所正造田屋の明るき二階腰障子
朝しぐれ代官屋敷に明り窓
義士の日や亀甲きつちり男松
独り居や振子時計の音冴ゆる

佐野 芝宮留美子

紅葉して犬蓼群るる池の縁
石文や山茶花の白つくしたる
神の留守鸚鵡「またね」を繰り返す
雪吊の青竹匂ふ艶めきて
しづかなる茶屋街の朝冬ぬくし

佐野 島田 和枝

露地裏の小さき古書店花八手
落葉して明るさ広ぐ空のあり
冬に入る足跡一つなき浜辺
初しぐれ托鉢の佇つ渡月橋
リハビリはまづ深呼吸雪の窓

佐野 売野 緑

再びは開けぬ門八つ手咲く
稽田をリード伸び切り犬駆くる
棟の実降る旧道の三叉路に
軽便の鉄路の跡や空つ風
干柿を隙なく箱に仕舞ひけり

佐野 店網 洋子

藩邸の小径つつじの返り花

浮雲や小春の沼辺ウオーキング
寒晴や日光連山しろじろと
中天の寒満月や兄想ふ
髪切つて少し早めの年用意

足利 大木 茂

大霜の野道一列登校児
眼帯の片眼の闇や蜜柑剣く
裸木の揺れ無き梢空真青
猪鬣しげに糝撒しなき足す杣の暮
明日手術日差し豊かに年の暮

土浦 澤 照 枝

毛糸編む投げ出す足に日の温み
頬被して銀行へ年金日
裏山に枝打の声寺を守る
筑波嶺の空の青さや大根引
蓮掘つて蓮に被する濡れ筵

加須 茂木 弘子

木洩れ日の小径を木の葉時雨かな
茶の花や丘に藩主の館跡
宮守の負ふ満杯の落葉籠

正造生家閉ぢて明かるし白障子
綿虫の賑はひ影も声もなく

さいなま 山本 右近

山ねむる磐に発破のあと深く
ビル火事のめらめらと空破りゆく
北風へ賽銭にぶき音かへす
冬の雲割れて日矢さす関ヶ原
焦げ跡の残る流木冬の浜

所沢 三好かほる

ザビエル祭銀杏落葉の匂ふ中
蚤の市枯からすうり籠盛りに
ナウマン象の化石に冬日濃かりけり
お不動の太鼓高鳴る小春かな
熟柿食ぶる銀のスプーン誕生日

所沢 南雲 秀子

四阿におしやべり弾む冬紅葉
黄落の銀杏並木を人力車
境内に砂利の如くや銀杏の実
払曉に救急車ゆく師走かな
夕食はおでんと決めて買出しに

千葉 田 中 道 江

高層の一点冬日の光の矢
デパ地下に出張る鬼太鼓冬休み
料亭の聖樹と有線電話器と
小刻みにビル影ゆらす冬の川
目指したる一番電車息白し

千葉 松 浦 陵 保

日溜りの桜落葉の温みかな
海風に三浦大根吹き曝し
降車ベルの音の響きも冬温し
冬の雷機体に残る爪の跡
ごろごろと冬瓜置かるる畑の隅

千葉 喜 多 恭 仁 子

海の如通天橋より冬紅葉
湯豆腐の旨し姦し京の宿
冬うらら五皿平らげ出石蕎麦
新婚の窓に真紅のポインセチア
俳諧は人生の杖去年今年

千葉 大 月 玲 子

八雲分け日矢射す野辺や神無月

北風の磨きし空の明け初むる

蕪村忌の月は東の雲間より
山眠り五百羅漢も眠りけり
球根の土こんもりと冬日抱く

佐倉 大内佐奈枝

いてふ散るむなしく大き招魂碑
触れ合ひて皂角子の実の風に鳴り
櫟の実の枯れきつて葉の青し
日向ほこポップコーンはカレー味
鮫鱧鍋礁に荒き波がしら
靴音の咳こぼしつつ遠ざかる

佐倉 三 屋 英 俊

やはらかな冬日眠れるものの上に
百日の荒行けふの小春かな
壺の酒呷る羅漢や山眠る
熊暴る白山権現在す村
大寺の裏の細みち薬喰

佐倉 横 川 良 子

手焙に客の寄り来る朝の市
連結器外す寒夜の駅舎かな

用済みの植木鉢積む年の暮
がばがばと音たて搔けり桐落葉
ブーニンのシヨパン親しき夜長かな

四街道 興 太 雅

木道の落葉の嵩を楽しめり
セスナ機の音の零るる小春空
立冬や皇帝ダリア空に置き
荒縄の梯子となりぬ干大根
軒先の振分け荷物吊し柿

四街道 塗 木 翠 雲

狭霧立つ沼面ゆさぶる鯉の鱗
武道館の屋根に降りたる木の葉雨
真筆のふる池句碑や冬の鵝
広げ干すタオルの凍る一夜かな
薪小屋に薪たつぷりと冬に入る

船橋 山 下 良 江

鴉鳴くメタセコイアの枯木道
鳴きつづく尉鶏の声こだまして
爆音のひびく水辺の冬紅葉
窓の外山茶花あふれ風に揺れ

枝先の終の一花に冬日差す

船橋 久保村 淑子

一帯の林明るき石路の花
香を放ち白山茶花の散りつづく
カーブミラー冬夕焼を捉へたる
薔薇園の薔薇の枯葉の芳しき
原生林ぬけ小松寺の冬紅葉

※小松寺……南房総市の仏教寺院
船橋 片 桐 帆 一

単純に冬木となりし櫻の木
この顔に父の鼻あり小春の日
山畑の冬葉の畝のみづみづし
大根提げ駐輪場を抜けて来し
冬日落ちそば蔵の出す茹で湯かな

船橋 宮本 加津代

公園の枝払はれて冬構
診察待つ前も後ろも横も咳
願ひごとなほ少しあり鳥渡る
締め直す眼鏡の捻子や年の暮
柚子二つ湯船に浮かべ冬至風呂

船橋 中嶋 久登

蜜柑狩車窓の富士に席立ちぬ
夕に戻る雁の生活リズムかな
銀杏のピニール袋固く閉づ
百度石銀杏落葉に沈みたる
人影と雪吊六基池の面

柏 山本とく江

対岸に薄紅しかと冬桜
日に風に移ろふ影や枯蓮田
色尽くし梢より錆ぶる冬紅葉
着ぶくれて老が背伸びの顔認証
潮の香の離宮の日差し石路の花

柏 内田 郁代

乾門抜けて閑かな紅葉狩
朱を極め冬日を弾く冬青の実
八重山茶花白を極むる男坂
海に出て茜差したる冬の雲
カステラの粗目際立つ漱石忌

柏 古川 京子

たぶたぶと岸辺の波や冬ざくら

柗の花嗅ぎをれば師のけはひ
リピングにブルメリア咲く開戦日
紅葉宿暮れて川音昂りぬ
五年分の文字に膨らみ日記果つ

流山 穂 莉 照子

日に研がれ風に研がれて冬木の芽
着水の鴨に加はる重さかな
苔玉にふくらんでゆく冬日かな
助手席といふ指定席石路の花
半分に分くるどら焼小六月
短日を戻りし猫の鳴く戸口

市川 奥澤よし江

さらさらと樹梢離るる落葉風
命終へ冬三日月に旅立てり
葬送の風を背中に冬夕焼
冬星の影がきらりと術後の目
シュトールンポストに置かれクリスマス

東京 名 和 政 代

術後三日まぶしく仰ぐ七五三
グラタンの匂ひかうばしサンタ来る

黄葉掃く新撰組の鳥居まで
八卦見の男うながす冬帽子
冬の夜の病室照らすライトかな

東京 藤田裕子

雪螢追ふ西郊の石畳
雪吊や雪なき町の空真青
賓頭盧の膝のてかりや冬うらら
知らぬまに指に切り傷十二月
針箱の糸くづまるめ年用意

東京 島野ひさ

歳時記に忘ることなき名を見つけ
大根煮るこのひと時のしあはせよ
留守電に娘の声や年つまる
取りたての白菜はがす白さかな
花柎周乃先生上野に集ひ師の墓参

東京 加賀葉子

銀杏並木箒とりどり落葉掃く
銭湯の脱衣所へ香や柚子湯の日
枝しなり低くなりけり蜜柑山
しぐるるや百日紅の幹色深め

水底の寒鯉影と重なりぬ

東京 久留島規子

神牛の鼻先撫でて七五三
走り根を埋め尽くして銀杏散る
冬の日を撥ぬる玻璃戸の粗格子
源義の庭に乾びし芭蕉の実
茅茸の二階に眩し白障子

※源義……角川源義(俳人・国文学者)

東京 下嶽孝一

花びらに花びらの翳白芙蓉
包丁を研ぐ手に今朝の寒波来る
切株にまた入れ替はる月の客
夕霧やもんぢやの街へ渡る橋
月光に立て掛けられて高梯子

東京 岡村純子

ゆつくりとパン焼く今朝や冬浅し
一つづつ朝日浴びゆくみかん山
銀杏散る画板に肩にとめどなく
枯木立鳥入れ交はり鳴き交はり
魚屋の呼び込み高し暮早し

東京 草間三香子

真夜目覚む廊の軋みの音冴ゆる
健啖や白寿の伯父の頬被
さはさはと担ぐ笹竹冬深し
過ぎし日の納屋の明かりや藁砧
山門を入りて香の濃き黄水仙

東京 桑原優美子

大根のどこを切つても水の音
日の当たる石に移れる冬の蝶
いつよりか無口になりて毛糸編む
街路樹に力瘤あり寒波くる
寒桥に少年の声混じる路地

東京 三村紀子

屋敷林伐採の痕初時雨
活けられて輝き戻る冬薔薇
冬薔薇の剪られて刺の鋭さよ
天眼鏡手に客待ちの街師走
エンゼルの憩ふガラスの聖樹かな

東京 小池清晴

外されぬ選挙ポスター冬ざるる

凍星の薄れゆく空鳥の声

金秋の額縁となる乾門
手に馴染む今川焼の熱さかな
冬晴や天まで届け大銀杏

東京 一由久美子

かろやかに飴切る音や七五三
掃き寄せて銀杏落葉の工学部
寒葵水琴窟の音かすか
礼拝の声のくぐもる冬日かな
猫足のピアノの椅子や漱石忌

武蔵野 砂地宏子

かすめゆく落葉香りをふと残す
冬の庭桜の幹の古き傷
天辺に夕日集むる枯銀杏
寒空を背負ひ黒門なほ黒し
風邪ひきの御八つかステラ幼き日

武蔵野 松井宣夫

西の市ケバブ屋台の異国人
冬枯の荒地に仏壇捨てられて
風呂吹や隠し包丁十文字

野仏に一粒置かれ実万両
また発てり膝に止まりし冬の蜂

立川 正田 華子

小春日や母の手鏡磨き上げ
石路の花三角屋根の農具小屋
参道の大き切株日向ほこ
極月の枝こつこつと診療所
補聴器の電池買ひ足す年用意

町田 広瀬 俊雄

はらはらと銀杏落葉の音もなく
力なく何処に舞ふや冬の蝶
ぼろ市や狸の皮も吊るさるる
大山へ続く山路や冬すみれ
北風や地蔵の前掛けはためける

町田 桔梗 純

花終寺町通りにいりこの香
植木屋の落葉さらひて行きにけり
土煙あげ庭園の落葉掃く
冬灯木目の著き古ピアノ
冬晴や橙四個かたまりて

日野 喜多尾 明子

綿虫や門に小声の影ふたつ
ねこじやらし枯れて空き地の風のいろ
書き上げて肩の凝りたる一葉忌
ゆるき歩を話しつづけてゆく小春
もう交はず言葉のなくて落葉道
美容院出て暮市にまぎれたる

横浜 西本 才子

阿夫利嶺を茜に染めて冬夕焼
竹落葉深く踏み行く城址かな
年忘れ友手作りの渋皮煮
玻璃越しの部屋の明るくポインセチア
冬木立裾に石棺据ゑありぬ

横浜 大橋 雅子

水仙の蕾揃ひて立ち上がり
花色のテープ巻かれし球根植う
五か月の曾孫の重さクリスマス
雑煮用の京の白味噌年用意
寝違へて首サポーター年の暮

横浜 三木 豊子

相席の老舗の蕎麦や大晦日
鳴り続く秩父ばやしや冬火花
家中の鍋磨き上げ年暮るる
青丹よし奈良の尼寺煤払
空青く風の無き日や布団干す

横浜 星野 信子

鴛鴦の頸寄せ合ひて水を掻く
教会の炊出しクリスマス近し
開戦日動かぬ時計売り払ふ
年上に席譲らるる師走かな
着ぶくれて星降る町のカフェテラス

川崎 新妻 奎子

病室の小さき窓の師走空
新しきセーター似合ふ見舞の子
病院食冬至南瓜のほつくりと
病室に庭の蜜柑を飾らばや
新しき家見つけたり枯木道

川崎 大久保 進

冠雪の富士を彼方に大枯野

丸椅子に尻をはみ出しおでん酒
止め椀のすましの花麩年惜しむ
凍滝の暮れて青みの深まれり
カーテンに影を遊ばせ冬の蝶
脳天にナイフ一刺し血抜き鱧

鎌倉 恒川 清爾

小夜時雨目鼻欠けたる六地藏
冬麗や友の第九を補聴器で
ぼつぼつと家に灯や冬田道
冬ざれや小さき観音イエス抱き
アルバムの子は逝きたり冬銀河

伊勢原 佐藤 和子

掃かずある銀杏落葉の長屋門
粗壁に尻ひくひくと冬の蜂
葉も花も深紫に菊枯るる
海光を集め岬の冬すみれ
暖色のあふるる花屋十二月
赤かぶら掌丸く洗ひけり

静岡 大村 峰子

冬満月凧ぎたる湖の上にあり

時雨来て山家の窓に灯の点る
拾ひては顔に当てたる朴落葉
冬の鴟空の高さに声を張る
産土神の鳥居潜るや穴惑ひ

静岡 宮崎知恵美

きちきちの始祖の墓より飛び立てり
山門へ登り着きたり萩の風
草の絮立たせトロッコ列車来る
仕事より戻り草の実取る仕事
郁子一つ「食ふてみるか」と貰ひたり

静岡 望月敏男

新米の艶を愛でつつ昼餉かな
乗り換ふるたびに秋風濃くなりぬ
師の墓や宇津の岨路の秋闌くる
師の墓に爽籟を聞く俳句どち
師の墓を抱く端山の粧へる

静岡 藤原千代子

石路の花生垣越しに人の声
蹲に天保の文字雪螢
冬蝗潜む升形陣屋跡

焼藪屋四基の竈黒光り
ライダーのリユックはみ出す葱二本

静岡 萩野加壽子

双肩に夕日の重さ憂国忌
焼芋屋軍手に探る焼き加減
アンコール果て凍星の鎖なす
密やかに受くる月光竜の玉
冬薔薇祈りの指をほどきけり

静岡 小川明美

行き先は冬の虹立つあの辺り
石切り場に狺犬の声筈して
猪垣や堆肥の匂ふ川原畑
茸き立ての杉皮の堀避寒宿
立つ羅漢座る羅漢へ神渡し

静岡 藤本節子

足の指ぐうちよきばあと小六月
百歳の婆は早耳日向ほこ
コーラスを止めてしまへり大きくしゃみ
床の間に艶めく瓢年つまる
山眠る熊出没の立看板

静岡 大長 文 昭

笹鳴きや万葉仮名を読みをれば
母の手を離れけんけん七五三
前山の影黒々と冬田打
枯木立空へ近づくと磴百段
冬落暉するする沈むゴッホの黄

静岡 加山 ひさ子

夜の更けて雨音ばかり室の花
茶の花や雲剥がれゆく朝の富士
雑炊やたれにも逢はぬ日の暮るる
冬の夜や丸帯かがる手に力
一茶忌の一汁一葉楽しめり

静岡 石川 裕子

捨てられぬ看取りの日誌帰り花
針穴を糸のすらりと小六月
聖菓焼くボール大小使ひ分け
放送のマイクの拾ふ大噓
失せ物を取りに師走の交番へ

静岡 本多 ひとみ

山腹を疎らに染むる冬紅葉

漆黒へ艶めく明かり冬の月
夕間暮れ苔むす庭の雪螢
銀杏落葉枯山水の波の間に
罅走る手水鉢這ふ枯葎

静岡 杉 澤 修

少年の手綱の刻む冬日かな
おが屑に仔馬横たふ冬ぬくし
茶の花や遠嶺に雲の湧き出づる
玉砂利を踏む音呀ゆる札所寺
振出しに戻る話や花八手

静岡 松 永 博子

冬ざれやへの字に結ぶ邪鬼の口
ふつと吐く息に大綿失せにけり
境内にテントを張るも年用意
冬泉や水口に鯉集まりぬ
方丈の畳にひとつ散紅葉

射水 成瀬 真紀子

気嵐や立山越しに日が上る
七五三走れば背の鷹飛べり
天落ちて来しかと思ふ雪起し

弟は兄追ひ風は落葉追ふ
着ぶくれを言訳しつつ試着室

金沢 今越みち子

リハビリの足踏み十回冬日和
校庭に落葉の渦の立ち上がる
ざらざらと風に掃かれて落葉かな
星空にあまた響けり除夜の鐘
オルガン弾く指の忘れぬ聖歌かな

金沢 伊藤美音子

風紋の波形くつきり蟻蛸飛ぶ
式部の実鳥語いよいよ滑らかに
店閉づる一膳飯屋枇杷の花
一笑塚ほつたらかしの落くわりん
石榴裂けパズルあつさり解けるかも

金沢 高田たみ子

落葉搔く親ゆづりなる太き指
マリンバの深き音色や冬紅葉
たたなはる遠嶺に映ゆる冬夕焼
欣一忌過ぎ咲き競ふ冬の薔薇
咲き揃ふ白山茶花や百度石

金沢 豊田高子

父の忌の鉦の音濡らす時雨かな
湖に立つ鳥居を潜くかいつぶり
枯草の茎一筋の青さかな
裸木に生きるあかしの鼓動かな
磨ぐ風に磨がる一樹冬木の芽

金沢 松井佐枝子

一枚となる海と空冬ぬくし
小春日や古桶を干す四十物屋
開戦日空き箱を踏み潰す音
山茶花の朝咲きつぎ散りつげり
喪へ急ぐ道いくたびも村時雨

金沢 石川純子

仏舍利塔高きに光り山眠る
うたた寝の夢にさ迷ふ炬燵かな
夜の更けて湯船に踊る柚子ふたつ
雪しきり母の口ぐせ蘇る
隙間風張子の虎の首振れり

金沢 河野尚子

積み上げし書に薄き塵漱石忌

俱利迦羅の奈落包める葛の花
単線の車窓に熟柿触れさうに
光る海遠くに見えて大根引く
藁束を積みて厩舎の冬囲

金沢 道場 啓子

鶉のしきりに鳴けり無縁塚
夕暮の風の加はり散紅葉
枯れすすむ里に野猿の屯して
霜月の町一様にセピア色
黄味ひとつ熱き湯に溶き霜の朝

金沢 杉本 年虹

パラグライダー次次飛ばし山粧ふ
神門の神馬の鈴や七五三
小春日や城址に残る海鼠塀
長元坊振り向きざまの眼かな
獅子頭へ咬ます金髪さし向けて

金沢 南 恵子

ときをりは足湯へ紅葉散りにけり
冬菜畑国宝の塔目のあたり
ロンドンの空は灰色漱石忌

ソムリエの蝶ネクタイや聖夜くる
合図待つ獵犬と目が合ひにけり

金沢 松下 信子

地蔵堂の供花新しや小鳥来る
立冬の風を聴きをり朝厨
枯木星幾光年の彼方より
古文書を障子明りに緋けり
古書店の留守を預かる返り花

金沢 北川 禮子

参道に大原女ひま販ぐ葉付き柚子
落葉掃く父の作りし竹箒
鮭上り水より昏るる手取川
触れ太鼓響く古刹の煤払
海鳴りや崖に傾ななるる水仙花

金沢 清水 英理子

厨より小豆煮る香や夕時雨
町なかの湯屋の煙突冬ざる
どの子にも戦なき日を聖誕祭
鯛起し父の一喝懐かしく
「百年会」銘打つ喜寿の年忘

金沢 松田好子

姨捨の駅見下ろして木守柿

牡蠣を焼く島崩るといふ話

石垣の刻印巡る冬帽子

冬うらら長き列なすラーメン屋

寄鍋やあうんの息の同期生

金沢 井端久子

柿の実の朱の混み合へる廃家かな

一葉落つまた落つ翁塚に触れ

甘えくる白猫を抱く近松忌

献饌椎葉神楽二句へ猪の頭二つ椎葉の夜

カッポ酒呷り一夜の神遊

七尾 谷渡末枝

根深汁留守番の部屋片づけて

毛糸編み舌に転がすカン口飴

廃材を燃やす煙や笹子鳴く

地震跡の村足早に獵夫さつおかな

狩人の血痕著き草囊

白山 加藤美栄子

まづ肝を喰ふとや獵師焚火して

靴の炊ぐ手ぎはや宿百年

五葉松の下で指図の年木樵

煤逃や麻雀牌の音きいて

つり銭の凍つく越後だんご売り

障子開けお濠めぐりの屋形船

七本槍の武功をたたへ山眠る

墨入るる鐘塚へ舞ふ冬の蝶

恵比寿講閣に木々浮く護摩火花

名水に生くる熊川榼紅葉

清流のしぶきに点る石露の花

小春日や葛ぜんざいにほつこりと

狐火や昔担ぎし野辺送り

下駄鳴らし外湯めぐりの大嚏

冬日濃し残る番所の弓鉄砲

山門の門かけて山眠る

六畳の明り障子や根岸庵

雲水の竹簀七尺雪囲

敦賀 中川雅月

山門の門かけて山眠る

六畳の明り障子や根岸庵

枯尾花背文を超えて鉄路錆ぶ
回 転 の 狐 火 見 や る 厠 窓

敦賀 中 村

優

瓜割の凍滝水車ゆるゆると
子ら燥ぐ聖夜の回転木馬かな
煮凝のぬるりと睨む魚の眼
手品師の指先妖し冬薔薇
夜廻りの吐く息酒の匂ひたり

敦賀 為永香月枝

小春日や番所役人居眠れる
解けゆく飛行機雲や冬夕焼
散紅葉路傍の石の仏めく
つるし柿燠す煙の棚引けり
毛糸編む赤と緑をだんだらに

徳島 福島 吉 美

廃鉦の出口に舞へり雪ぼたる
売れ残る零余子を買ひて旅終はる
身に沁むや夫押す妻の車椅子
回廊の落葉掃きだす棕櫚箒
揺れて着くトロッコ列車榎紅葉

徳島 村上 和 義

みどり児に風やはらかき秋桜
仕出し屋の裏に広がる枯蓮田
石庭の渦巻く砂紋初しぐれ
大小の渦の底鳴る瀬戸の冬
星のごと川面に揺るる聖樹の灯

徳島 宮西 修 一

冬めくや背筋伸ばせと妻の声
柿落葉乾きし音の転がり来
初時雨句読点なきメール来る
街騒の中を流れて浮寝鳥
吉野川真鴨鈴鴨鴨の陣

徳島 平岡 功

城垣の桜紅葉や空真青
躍り口へ飛石濡らすひと時雨
一瞬の大河を跨ぐ時雨虹
石落咲きて砲台跡を明るうす
むらさきの風辣菲の花盛り

石井 木内 マヤ

橙の数をかぞへて青き空

聖樹かな昭和のままの村役場
カップルは影絵のごとくクリスマス
古酒を酌む夫や瘦せたるコルク栓
鷹渡る空の王者の目を持ちて

小松島 岡田 あゆみ

小春日やよよと泣き伏す木偶芝居
念願の師とイタリアン葛紅葉
寒潮のしぶき掠むる海鷗かな
にほどりの親子同時に潜りけり
番号で呼ばるる医院そぞろ寒

松川 入河 大河

冬帽を被り親しき地藏尊
草陰に無縁仏の冬帽子
釣鐘に千年の樹の枯葉降る
霜降や踏みたる一步もつれたる
はてさてと時雨の畑へ出来を見に

福岡 宮田 千恵子

ひとり居て猫がじやまする冬支度
受診者の誰より医者の大マスク
熟し柿どすんどすんとトタン屋根

風音のいつもどこかに枯尾花
ドーナツに珈琲はモカ冬に入る

長崎 丸本 祥夫

マリア像のベールを掠め秋つばめ
曼珠沙華役場の時報と寺の鐘
一本の茎より千の菊の花
店仕舞上座にでんと大南瓜
原付の法衣はためく萩の寺

西海 山下 敦子

掘り終へし芋畑の土赤く照り
凧の過ぎたる朝や空ひろく
開戦日日の当たりたる遠き島
ひとところ落日当たる冬木かな
ふとき幹見せて黄葉の降り続き

宮崎 中山 宣

冬霧に銀河鉄道めく車輜
陶器市に釘打つ音や水仙花
清き水多き火の国初時雨
鴨の陣解れる湖水日和かな
鷗来て鴨の驚く湧水地

宮崎 中山 芳 教

餌を漁る夫婦雀や冬麗
野辺の道袖に刺引く枯茨
手付かずの病院食の冷えにけり
雲の型乱れて西へ冬ざるる
黄を灯す竹林の裾石落の花

宮崎 鳥居 達 史

去年今年昭和百年引き摺りて
菜園のみどりに跳ぬる初雀
二戸灯り三戸の空き家山眠る
寒林へ一筋の径父祖の墓
廢校碑に児童の手形冬萌ゆる

那覇 中 本 清

村守の獅子にそれぞれ秋のこゑ
石落咲くや小舟通ひの那覇むかし
首里^{スライムイ}杜の風を濁せり寒鴉
次郎柿きりりとそろふ木箱かな
流されて付かず離れず浮寝鳥

那覇 辺野 喜宝 来

冬蝶の日向選りゆく首里小道
冬萌のほつこり子らの石遊び

街川の飛石濡れて夕千鳥
父の忌や届く木箱の冬りんご
十二月綺羅な箱の溢れをり

西原 宮 城 勉

野猫伏す己が小春の影敷いて
日時計の針影あはき冬うらら
荒波の叫^{おち}びに真直石落の花
舞ひをはるふうに地に伏す木の葉かな
壁地図のアフリカを這ふ冬の蠅

島城 渡 真利 真澄

冬の井の平らかに澄み村の辻
小高きに塚あると見ゆ寒雀
短日や母屋に隣る位牌小屋
片時雨村井にせまる開拓地
畳紙取り替へ仕事納めかな

ベルン 鈴 木 波 江

猫に留守頼みて出づる十二月
古杭に貝がびつしり冬の浜
干潮を歩きし夜の牡蠣料理
見返りて動かぬままや冬の鹿
シュークリーム焼いて聖誕祭の朝

同人作品の佳句

江見悦子選

地平線ぐるりと明き冬夕焼
 冬日浴び指なぞりゐる時刻表
 いてふ散るむなしく大き招魂碑
 熊暴る白山権現在す村
 着ぶくれて老が背伸びの顔認証
 日に研がれ風に研がれて冬木の芽
 雪吊や雪なき町の空真青
 ゆるき歩を話しつづけてゆく小春
 丸椅子に尻をはみ出しおでん酒
 赤かぶら掌丸く洗ひけり
 双肩に夕日の重さ憂国忌
 行き先は冬の虹立つあの辺り
 大小の渦の底鳴る瀬戸の冬
 首里杜の風を濁せり寒鴉
 壁地図のアフリカを這ふ冬の蠅

落合裕子
 高野松風
 大内佐奈枝
 三屋英俊
 山本とく江
 穂苺照子
 藤田裕子
 喜多尾明子
 大久保進
 佐藤和子
 荻野加壽子
 小川明美
 村上和義
 中本清
 宮城勉

同人会だより

「万象」オンライン同人会の参加者募集

オンライン同人会は、全国の「万象」同人が共に切磋琢磨する場として発足し、今年で5年目に入りました。PCまたはスマホの簡単な操作で参加することができます。オンライン同人会に興味のある方は、事務局へお気軽にお問合せください。

◆オンライン同人会の実施要領

〔句会は「夏雲システム」を使用〕

- ① 対象は全国の「万象」同人とする。
- ② 月例で行い、句会費は無料とする。
- ③ 投句 3句
- ④ 選句 主宰…10句
顧問・役員…7句
同人…3句
- ⑤ 投句期間 毎月 1日～5日
- ⑥ 選句期間 毎月 6日～9日
- ⑦ 結果公開 毎月 10日

◆参加申込はEメールで事務局（小池清晴）まで。

メールアドレス k217122gogo@forest.ocn.ne.jp

（電話番号 090-4132-5807）

・申込の方には事務局より簡単な操作説明とパスワードを返送いたします。

1月の「万象」オンライン同人会高点句

- | | | |
|---|----------------|-------------|
| 6 | 裂織りの機を掃さぶる寒の雷 | 谷渡 末枝（七尾） |
| 6 | 春待つや枝に御籤の固結び | 大久保 進（川崎） |
| 5 | 柚子風呂や受けし赤子の蒙古斑 | 下嶽 孝一（東京） |
| 5 | 星を呼ぶやうに泉啼きにけり | 穂刈 照子（流山） |
| 5 | 呼び鈴に庭から返事して師走 | 下嶽 孝一（東京） |
| 5 | 初夢やそば屋の奥に良太さん | 片桐 帆一（船橋） |
| 4 | 蟻螂の卵に隣る冬木の芽 | 奥 太雅（四街道） |
| 4 | きらめきは波の小躍り初日さす | 三屋 英俊（佐倉） |
| 4 | 水平線に雲をたたみて初御空 | 古川 京子（柏） |
| 4 | 星屑や紫紺の闇を狐啼く | 谷渡 末枝（七尾） |
| 4 | 屠蘇をつく孫をめとりし青年に | 柳澤 宗正（横浜） |
| 4 | 雪女替女の鄙唄聴きゐたり | 三屋 英俊（佐倉） |
| 4 | 逝きし人胸に留めて年送る | 成瀬真紀子（射水） |
| 3 | 飄飄と風が風追ふ大枯野 | 平岡 功（徳島） |
| 3 | 買初の時計の刻むわが余生 | 成瀬真紀子（射水） |
| 3 | 真ん中のひ孫よそ見や初写真 | 山本 右近（さいたま） |
| 3 | 何ごともなく眼鏡拭くお元日 | 高野 松風（新潟） |
| 3 | 家中の蒲団を干して子等迎ふ | 奥 太雅（四街道） |
| 3 | 煤逃や二つ返事の友誘ひ | 大久保 進（川崎） |
| 3 | 潮入りの水門閉づる寒の入 | 一由久美子（東京） |
| 3 | 白き息吐きアンカーの孤独なる | 桑原優美子（東京） |
| 3 | 御降りの洗ひし復路駆け抜くる | 奥 太雅（四街道） |
| 3 | 山眠るねむらぬものの襲ふ里 | 下嶽 孝一（東京） |
| 3 | だんまりも生きる方便枯柏 | 杉本 年虹（金沢） |
| 3 | 楳やまた裏返す砂時計 | 穂刈 照子（流山） |

（*句頭の数字は点数を示しています）

2月は「万象俳句会年会費」の「納入月」です
ご理解とご協力を宜しくお願い致します。

会員・同人の皆様へ

- ① 「万象」俳句会の会計年度は、4月1日～翌年3月31日です。
- ② 振込用紙は、毎年「万象」誌2月号に挿入しています。振込用紙を紛失された場合は、郵便局備付けの振込用紙をご利用下さい。
- ③ 振込みは郵便局窓口、又はATMからお願い致します。
- ④ 振込み締切日は2月末日です。2月末日までに振込みをお願い致します。
- ⑤ 2月末日までに振込みが無い場合は、4月号以降の配本を停止させて頂きます。
振込先は、郵貯振替口座番号【00230-0-10381】
口座名「万象俳句会」です。
- ⑥ 会費は、前納制で一年分をまとめて振込みをお願いします。
金額は、
- ⑦ 一般会員 一、〇〇〇円です。
同人会員 二、四、〇〇〇円と同人会費三、〇〇〇円の
合計二七、〇〇〇円です。
- ⑧ 振込み頂いた会費は、原則として返金致しません。
- ⑨ 振込用紙の半券(控)を「領収書」と致しますので、大切に保管をお願い致します。
- ⑩ 振込手数料は「ご本人」負担とさせて頂いております。
- ⑪ 同人会費(三、〇〇〇円)は、後日、同人会会計口座へ纏めて振替えます。

万象俳句会 会計担当 松浦 陵保
万象同人会 会計担当 小池 清晴

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2026年3月号

特集

「独り」は力
〜俳句と孤独

- ◎ 孤独がもたらす力 和田秀樹(医師)
- ◎ 孤独が個性を育む 下重暁子(作家)
- ◎ 孤独感から生まれた俳句

行方克巳 守屋明俊 恩田侑布子
辻美奈子 西澤日出樹 小田島渚

グラビア 俳句界NOW 古澤宜友

特集 俳界ちやんネル

〜令和の新結社たち

- 「あくあ」 荜羊右子 「さら」 神谷章夫
- 「星座」 樋口保 「風琴」 皆川燈
- 「実の会」 桑田真琴

「シリーズ」 推薦! 注目・期待する俳人④

- 田口耕 大川畑光詳 託間えりこ
- 田中みちこ 金子圭子 伊波とをる

セレクション結社「俳句座☆シーズンズ」

「注目のお墨」 村田まみよ 『光の遊戯』

連載

- 宮坂節生 青木亮人 林誠司
- 石井隆司 若林哲哉 広渡敬雄
- 坂口昌弘 八田九郎

「俳句界」投稿欄 一流選者10名!
充実の投稿欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社 文學の森

お求めは・・・〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞(一月号)

前田貴美子

乱るるも屑になりても萩の花 岡本敬子

咲き満つ「乱」れも、散り敷く花「屑」も、その風情、趣きは日本の美であろう。(白萩の触るるたび散る待ちて散る)(綾子)。「乱るる」敬子の「萩」は紅萩であろうか。

朝露に肩濡れしまま往診す 大内和憲

上五中七の体感把握、実感の言葉が作者の生き方までも語る。余白を語る。「肩」を「濡」らす「朝露」の確かさ、そして儚さ。自然界の繊細な美へ心置く「往診」の朝。待つ人の、訪う作者の、安心のひとつ日を願う。

枯菊の月日も焚けり子と二人 加藤季代

「枯菊」を「焚」く。それは「枯菊の月日も」そして作者の「月日」をも「焚」くことと、作者は思う。主観の強い句だが、この句が佳き句となるのは、作者の心の実感であることとして、読み手の実感までもが作者の主観に重ねられる句だからである。静かな夕暮の時であろうか。さりげなく置かれた「子と二人」の措辞は動かない。ある日の時を共有する「子と二人」なのだから。

封筒に記す花色種を採る 奥 太雅

花「種を採る」。その「花色」を忘れないように「封筒」に記す。その袋は真新しい「封筒」なのだろうか。それとも親しい人へ出しそびれた、書き損じの「封筒」だろうか。そんなことまで想像をめぐらしてしまふ。ある日の小さな行為が、その日を良き一日とする。そう、思う。

ざはざはとして真夜中の罽雲 内田郁代

「ざはざは」がいい。闇夜に広がる「罽雲」が作者に押し寄せて来るようだ。少しの月明りもあったのだろうか。「ざはざは」は音ではなく肌ざわりと鑑賞した。見る、聞く、匂う等五感の中でも、触感肌ざわりの実感は、繊細だがそれゆえに勝る気がする。作者にしか得られない実感だから。

緩やかに畳む便箋 十三夜 穂刈照子

「緩やかに」丁寧に、便りの言葉を包むように「便箋」を「畳む」。その便りは、と思いめぐらす力となるのが「十三夜」。季語は万人を繋げる共通の認識だから、その力を託すことにより、作者の体験や思いを共有することができる。良夜の満月ではない「十三夜」。どんな思いを重ねようか。

草踏んで草の色なるばつたかな 名和政代

「草踏ん」だのは作者なのか。「ばつた」なのか。作者の踏んだ草叢から「ばつた」がとび出す。それを「草の色」と詠む。草を踏んだのが「ばつた」であるなら、草に触れた力を

「踏んで」と実感したのでらうか。筆者の一読は「草跳んで草の色なる……」であった。「踏んで」は誤字かと思つた。

秋時雨灯さぬままに夕餉どき 藤田裕子

「夕ぐれの時はよい時／かぎりなくやさしいひと時。」（堀口大聖）静かだが寂しくはない。夕闇の近づく頃、街が無色になる頃だ。今日一日を思う時、自分をいとおしいと思う時。ささやかな幸せの実感は、そんな夕ぐれの時におとずれるものかも知れない。詠う「秋時雨」の翳り。作者の今日が静かに暮れてゆく。

命日に初物の柿ひとつ買ふ 久留島規子

数の力を考える。又、数を置く難しさを感じる。「初物」であるから、大切な人の「命日」なのだから、掲句の「ひとつ」には亡き人への思いを託し語らせる力がある。「初物の柿」を「ひとつ」手に包み「買ふ」。「命日」を良き一日にしよう。「初物の柿」は、静かな秋の日ざしでもある。

稲掛やもう一束を押し込んで 喜多尾明子

作業の景を詠むに、その内容を丁寧に説明していたら俳句の余白はなくなってしまう。「もう一束」、これで充分だ。焦点をしばる。言葉を削る。言葉の力を信じる。「もう一束」は、選ばれた言葉、選ばれた数の力である。

今日のこと大方終へて栗を食む 田賀 樫恵

「栗」は古くから私達に親しい。「大方終へて」なのだから、

まだまだ用事は残っているのだろう。でも今日のところはこれくらいにしよう。「栗」も茹であがったことだしおいしくいただこう。この「栗」、もしかしたら古里から送られてきたのかも知れない。それともいつもの店で、店主に勧められた初物だったのかも知れない。「栗」も又いろいろ語ってくれて楽しい。日常詠の親しさを「栗」の季語に託す。

失せ物の出でて新米炊きあがる 新妻 奎子

掲句も又、親しい日常詠。無くし物が出てきたから「新米」が「炊きあが」った訳ではないが、嬉しいではないか。思わぬ所から「失せ物」が現れて、「新米」までが「炊きあが」つて。今日は上々。これで良し。

胸うすくなりたる我に秋夕焼 荻野加壽子

「胸うす」き人は美しい。夏の夕焼のように強く激しくはないが、静かに暮れ急ぐ「秋夕焼」のように、作者の重ねてきた日々も又、美しい。

カーテンに十字架の影秋日伸ぶ 木内 マヤ

「十字架の影」が「カーテン」に揺れる。祈りの心のように揺れる。「カーテン」に隔てられた「十字架」であるのがいい。その「影」であるのがいい。「秋日」が「伸」びて、作者の祈りは神に届くのだろう。もしかしたら、時に迷う信仰の心呼び戻す「十字架」の影だったのかも知れない。

冬晴の海

大橋雅子

子等の声海一望のみかん狩
黄のランプ灯すごときやみかん山
岩海苔を小鉢に伊豆の磯料理
冬晴や出航の銅鑼響きたる
霜月の空に屹立スカイツリー
橋下の冬日の影を船潜り
滑走路より冬空へ機体美し
赤いクレーンガントリークレーン。赤いキリンとも呼ばれる冬の埠頭に林立し
円筒型工場コンクリート工場でんと冬日浴び
遠くまで煌めく冬の波がしら



膝を痛めて以来あまり遠出が出来なくなっていたところ、思いがけず娘夫婦に東京湾クルーズに誘われ喜んで出かけた。

東京湾の海側からの眺めは大変新鮮で、赤い色の郵便船をみつけたり、船の三階の広い窓からゆっくりと移る景色を楽しむことが出来たりと、日常から解放された波穏やかな湾内周遊であった。

大鳥居 中川雅月

年明くる一番太鼓大鳥居
春一番絵馬をからから鳴らす音
校舎横入学式の土公神
石亀吐く長命水や涼を呼び
山車六基欧亜航路の栄華あり
絵馬堂の朽ちたる楔月重し
ユーカーリに樹医の手立てや秋深き
境内の榎木の火の粉背飛ぶ
七五三羽織袴にじよじよ履いて
芭蕉像何か言ひたげ時雨時



氣比神宮の歴史は大宝2年(702)に始まります。『古事記』や『日本書紀』にも登場する古社であり、北陸道総鎮守、越前國一之宮として古くから信仰を集めてきました。

境内に現存する大鳥居は、国の重要文化財の一つです。境内には御祭神が長生きされたことに由来するという湧水「長命水」があります。敦賀を訪れた芭蕉は、見事な月明かりに照らされた境内の様子を『おくのほそ道』に残しています。

光陰

高橋ひろ

如月や人形にある土踏まず
人形という顔や衣装などについて目が行くが、足の、
それも「土踏まず」に気が付いて一句を成した。

思い浮かんだのは近松の「曾根崎心中」。文楽では普通女性の人形には足はないらしいが、お初が徳兵衛に心中の覚悟を問う有名な場の為になわざわ足が作られたそう。季語「如月」が情景をさらに豊かにしてくれた。

紅葉谷小滝いくつか隠し持つ

村上市辺りでは10月位から紅葉を楽しめるとあった。
ここ静岡では11月の末から12月初旬にならないと色づかない。「小滝いくつか隠し持つ」の措辞で、鮮やかな紅葉の色とその間から白い水しぶきを上げる滝を見つけた驚きが句に表されている。何とも美しく羨ましい景である。

影らしき影持たぬもの冬桜

上五中七に「冬桜」の本質が描かれている。

はなびらの小皺尊し冬ざくら 三橋 敏雄

ひとゆれに消ゆる色とも冬ざくら 平子 公一

などの句にあるように儂げだが、寒さの中で咲く純白の花に我々は生きる力を頂いている。

千字文書き終へぬまま年変はる

「千字文」とは中国南朝の武帝に命じられた周興嗣が一夜で作りに上げた四字一句、二百五十句、千文字からなる韻文である。一字たりとも同じ文字はないそうだ。作者は千字文の臨書をされたが年を越すことになった。まだまだこれから活躍されることが間違いないということだ。

菊膾

小池清晴

打上げの注げば注がる瓶ビール
これは「瓶ビール」ならではの句だと思う。

久しぶりに会った友とのひと時か、それとも何かの会合か。上五中七にきりなく続く行為に少し困った表情も想像できる。俳諧味あふれる句。

焼き網の対角線に置く秋刀魚

食べ物の句は美味しそうに詠めと言われるがその通りである。

さて網に乗せようとしたがうまく焼き網に収まらない。そう、斜めにのせればと気が付いた。そんな場面が句になった。秋刀魚の大きさが読み手にダイレクトに伝わってくる句である。

きつと美味しく焼けて、ビールもそれとも日本酒も進んだことだろう。

病床の運ぶ箸先菊膾

秋深し痛み和らぐモカの味

作者の言葉にあるように帯状疱疹で辛い思いをされている事は存じ上げていた。俳句はどんな状態でも詠めると教えられてきた。とは言え本当に体調の辛い時、悲しみの只中にあるときは難しいもの。

しかし作者はめげずに類想感のない独自の俳句世界を詠みあげた。

薬飲むための食事よ目借時 平林 孝子

こんな時ばかりではない。大好きなものを口にして、一日も早くお元気になられることを願っている。

私のこの一句

かにかくにあかずかなしやこそごとし 山本右近

私の俳句づくりは晩年の出発である。定年を前に俳句でもと勧められて20数年になる。昨今は思考力・記憶力・体力共に衰えたので、これを区切りにする積りで一句試みたのであるが結果は逆となってしまった。句の中七のあかずかなしの「あく」は飽きることで、もう充分に俳句に浸ってたっぷりだの意味だが、「あかずかなし」はその逆でまだ成し足らない方に重心がある。つまり、もう飽きたとの思いは無くてもまだ不十分で物足りなく悲しいのである。そのあたりの未練がましさを糧に、もう少し頑張ってみたい。

草も木も虫も息づく瀧の霧 伊藤美音子

毎年7月5日に中能登町不動滝の滝聞きがある。石川・富山県にまたがり泰澄大師が開いた山岳信仰の石動山の修験者の水行場としたものである。

先達の法螺の音に誘われ滝垢離場へ進む。白装束の修行僧の経も滝しぶきにくぐもり聞きとれない。

風に乗って来る霧は、森羅万象あらゆるものをつつみこみ精気に満ちあふれていた。

滝聞きのと、里の人たちの心づくしの振舞の煮染、温かにおにぎりのおいしかったこと。

犬の毛のふさふさと行く月夜かな 佐藤和子

17年前の句である。句会も近づき兼題の「月」の句を作らなければと、丁度満月のその夜、何度も庭に出ては月を仰いだ。一句も纏まらずただ立ち尽くしていると、犬を連れた夫婦連れが偶然通りかかった。月光を浴びながら、ゆったりと歩いて行くゴールデンレトリバーの何と美しかったこと。

通り過ぎるまで見ていて掲句となった。大坪景章名誉主宰（当時）から「『ふさふさと行く』で犬の気分も、愛犬に曳かれる飼主の情感も、そして月光の優しさもすべてが表現されている。擬態語の強さだが、作者の心がそこにあるからその言葉が出るのだ」と、嬉しい選評をいただいた。進歩もあまりありませんが氣長に俳句を楽しみます。

お詫びと訂正

1月号66ページ下段にお名前前の誤りがありました。お詫びして訂正します。

誤 柳原キヨ子 正 榎原キヨ子

2月号21ページ松井宣夫さんの句

誤 朽ちかけし田んぼ地獄に秋の風
正 朽ちかけし田んぼ地蔵に秋の風

子規の写生論の展開 (四)

高木良多

三 愚陀仏庵

子規の写生論のみなもととなるもう一つ、愚陀仏庵における連日の句会における成果にも注目しなければならぬ。

子規は明治二十八年八月二十七日、日清戦争の帰途、大病を患い、愛媛県尋常中学校(松山中学校)に英語教師として赴任していた夏目漱石の下宿、愚陀仏庵を訪れ、そのままこの庵に居座り、二人の五十二日間の同居生活が始まる。

そこには子規を慕う地元の俳人、松風会のメンバーたちが集まり、階下では常時、俳句会が催された。下宿主である漱石は二階においやられ、どちらが客やらわからぬ始末だったが、そこは第一高等学校以来の付き合いである二人のことだから、うるさいと言いながらも、漱石もこの俳句会に加わり、生涯二千四百句のうち約三割を作ったという。

子規は同年十月十七日、漱石は翌年四月十一日、愚陀仏庵を後にすることになるが、のちに漱石が「ホトトギス」にその思い出を次のように書いている。

「僕は二階に居る。大將は下に居る。其うち松山中の俳句を遣る門下生が集まって来る。僕が学校から帰って見ると毎日のように来て居る。僕は本を読む事もどうすることも出来ない」

これを見ても、愚陀仏庵での句会ぶりを知ることができさる。

下村^{いんげん}為山が「松風会仲間^{いんげん}の絵」として描いた似顔絵によると、愚陀仏庵に集まった松風会のメンバーは極堂、露月^{きりぎりす}、狸伴、為山、叟柳、華山、野堀、半石、古白、愛松、松流、一宿、伸緑、梅屋、三鼠、甘露、碧梧桐、漱石らである。

この愚陀仏庵での句会で、子規は、仲間の人たちの作風を知り、己れの作風を磨き、仲間の人たちも子規の影響を受けつつ、互いに切磋琢磨して、写生論が確立されていったものと思われる。

子規は、年譜によれば、十七歳で東京大学予備門予科に入学したが、翌年、学年試験に落第、二十四歳で帝国大学文科大学哲学科から国文科へ転科を出願、聴許されたが、同年、学年試験を放棄、二十六年には日本新聞入社を機に退学した、とある。

学問の道では秀才のほまれ高く、よい環境に育ってきたのだが、子規は書物や学校の講義から学ぶものだけを学問とは考えない人であった。自分の眼で見、自分の耳で聞き、自分の手で実際に触れたものの感触をもっとも大切にす、いわゆる経験主義者で、愚陀仏庵での実践の中から、自分の俳句理論を打ち樹てていった。

こうして子規の写生論が具体的に展開されていく。
(次号につづく)

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ③

橋本 清

妹が見し 棟の花は 散りぬべし

我が泣く涙 いまだ干なくに

(五・七九八)

神亀五年七月二十一日、筑前国守山上憶良上る

「お前が見た棟の花はすっかり散ってしまいそうだ。私の流す涙がまだ乾かずにいるのに。」

筑前の国守山上憶良が大宰府の長官大伴旅人に奉った歌。神亀5年(728)の4月頃、旅人は一緒に任地に赴いた妻を亡くしました。左注の「七月二十一日」という日付は、死後百日目に当たり、その時営まれた百箇日の法要の際に奉られたものではないかと、井村哲夫氏は推定しています。旅人と同じく歌の道に秀でていた憶良が旅人の気持ちになつて作つた歌ですが、旅人の思いがそのまま表れているものと受けとめてよいかと考えます。

妻がこの世で最期に目にした棟の花。それが今や散り果てようとしている。役宅の庭に咲いていたものでしょう。それを病床から見ていた妻の姿を思い浮かべ、妻が最期に心を寄せていた風物のうつろいに悲痛な思いを新たにしているのです。

旅人の妻が庭の植物をこよなく愛していたことは、第25回(7年9月号)で取り上げた、「妹として二人作りし我が山斎は」(三・四五二)という歌によって知られます。憶

良はそのことをしつかり受けとめ、旅人に代わつてその思いを訴えているのです。

棟は梅橙の古名。初夏、淡紫色の小花が群がって咲きます。散りヌベシのヌは、物事が人の意思にお構いなく推移・変化してしまうことを確認する助動詞です。

た、かひに果てにし子ゆゑ、身に沁みて

ことしの桜 あはれ 散りゆく (釈道空「倭をぐな」)

「た、かひに果てにし子」とは、作者の養嗣子春洋(旧姓藤井)のこと。釈道空、本名折口信夫は、国学院と慶応で国文学を講ずる一方、短歌結社「鳥船社」を主宰していました。春洋は国学院で師事し、「鳥船社」にも入つて短歌を学び、やがて道空のもとで起居するようになりました。昭和18年応召、19年7月には硫黄島に出征し、20年同島で戦死。

硫黄島はその気候風土からして桜の花とおよそ無縁の土地。春洋が最後に見た桜は内地の兵営で目にしたものでしょう。おそらく入営後の面会の時に、養父道空と共に見たものだったと考えられます。

この歌は硫黄島の戦いの二年後の作です。お前が最後に見た桜は、営庭で一緒に見た、あの時の桜だったと思ひ当たつた時、今年の桜がにわか特別なものとして目に映つたのです。散りゆく花がこれほど身に沁みて感じられたことはかつてなかつた。そこに旅人の歌と相通じるものがあります。



上には上がいる

武蔵村山 松井宣夫

最近では珍しくもないリモコンですが、私が育った昭和30年代の下町では、テレビの普及率は低く、近所の家にテレビを見に行くのはごく普通の事でした。まして、リモコン付きなんて夢の世界の話でした。

そんな我が家にテレビが入った時、父は「お前のために買ったのだ」と言いました。チャンネル権は常に兄と父のものでした。兄は根っからのテレビ好きで、チャンネルを壊すほどでした。狭い部屋に一家6人が住んでいたのですから、テレビの前に座っていた私はリモコンのような存在でした。それから時は流れ、同年代の友人か

らこんな話を聞きました。「うちなんか四畳半で8人暮らしたよ。寝るときは押し入れに4人だよ」と。上には上があるものです。

「あれ？」予防

東京 安藤美酒々

我が家はTVと冷暖房機を遠隔操作している。点滅だけでなく、TVは予約録画で好きな時間に視られるのが有難い。家事を終え、さてという時に、「あれ？」という経験はないだろうか。「あれ？」その①は、定位位置に戻さなかったため、リモコンがどこかに隠れてしまった時。大雑把な性格が災いし、探し物をよくする。定位置を決めるだけでなく確実に戻す事が無駄な労力とストレスの削減とは分かってはいるのだが……。

「あれ？」その②は、操作しても動かない時。そんな時は落着いて電池交換すれば殆ど解決する。

冷暖房機の、特に近年の夏の冷房は絶対必要ですーっとお世話になった。下手に節約など考えると、夜中にも熱

中症で命にかかるとさえ言われた。直ぐに温度や湿度を整え快適に暮らすためにも、リモコンは定位置厳守が重要なようだ。

リモコン機能付きロボット

松山 入河大河

私の持っているロボットは、音声認識で動き、テレビを操作できるものである。ロボットに「テレビつけろ」と言えば、ロボットの腕が上がりピッと鳴り、テレビのスイッチが入る。ロボットが、リモコンの役割を果たしている。スイッチのオン・オフ以外にもチャンネル変更と音量の調節が可能だ。「チャンネルを変えろ」とか「音を大きくせよ」と言ってテレビを操作する。でも、ロボットは決められた音声しか理解していないので、正しく動作をしなかったり、「はい」と答えて意味なく首を振ったりすることがある。そんなものは、リモコンとは言い難い。私のロボットは、愉快で楽しいおもちゃなのだ。リモコンではない。

リモコンは難しい？

東京 久留島規子

子供の頃のブラウン管テレビでは、チャンネルをガチャガチャ廻したものだ。テレビからチャンネルが消えてリモコンが現れたのはいつ頃だろうか。

当初の有線のリモコンは1950年に、ワイヤレスのリモコンが登場したのは1960年代らしい。今の若者が知らないであろう懐かしいビデオデッキが発売された1976年頃には、既にリモコンが一般的だったと思われるが、定かな記憶はない。

テレビの進化にともない、リモコンも多機能になったが、最新の電子機器同様、使いこなすのは難しい。

リモコンで番組を探せない亭主殿は、専ら新聞の番組欄を頼りにする。当然、リモコンでの番組予約は苦手である。

あの頃の日常

静岡 中澤祐一

テーマを模索するうちに、ふと実家のテレビのリモコンを思い出した。手

のひらサイズの、丸く黄色いボタンが特徴的なリモコンで、それは今もなお、かつての定位置だったテレビ本体上の左隅に置かれたままだ。

両親が他界して久しい。長らく空き家のままだった実家を、今年になってようやく整理し始めた。ただ、テレビは動かせないものと、無意識に決め込んでいたせいだろうか。その上に鎮座する小さなリモコンに、これまで一度も手が伸びることはなかった。

思えば、母の亡きあと、最後にこのリモコンを使い、あの定位置へ戻したのは父に他ならない。

年末に、墓参のあと実家を訪ねる。その一品と、今までとは異なる心持ちで、静かに向き合ってみるつもりだ。

リモコンは所定の場所へ

大宰府 美山留唯

今やあらゆる家電製品は、いつの間にかリモコンの遠隔操作ができる便利な時代に変化した。

ある日、ダイソンの小さなリモコンが行方不明になり、ついに取り寄せる

事になった。その後、意外な所から出てきたのであるが、リモコンに慣れてしまうと、本体での操作に戸惑ってしまう。それ以来、リモコンの置き場にはとても気をつけるようになった。そして、なんだかリモコンに支配されている気がしてならない。

何事も便利になる事は有難いことだが、何かトラブルが発生すると逆に大変不便になる世の中になった。利便性の追求は大切な事ではあるが、どこか人の心の豊かさに逆行している面もあるとつくづく思ってしまう。

「万象ノオト」投稿募集

▽7月号「トマトケチャップ」

(3月末日締切)

▽8月号「川」(4月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

巻頭作家（二月号）プロフィール



村田由美子
(柏)

村田由美子さん巻頭の知らせは、句会の仲間にとって待ちかねた知らせだった。由美子さんは、昭和25年山口県宇部市生まれ。ご主人とは結婚後に、卒業アルバムで、小学一年の時同じクラスだった事がわかったと、微笑ましい。宇部女性合唱団に所属していた美声の持ち主である。ご主人の国内外の単身赴任を経て、東京転勤後は、銀行のロビー案内係に就かれた。その後、大型マンションに居を移されて、数名の有志と管理組合で、高齢者向けの「交流カフェ便り」を配信、交流の場も毎月企画し、2〜30名が参加する

イベントも実施していたが、75歳を機に退かれた。俳句は、その仲間の一人に手解きを受けた後「柏句会」に入会。記録では平成17年10月「万象」に入会されている。しかし、ご主人の大病もあり、なかなか投句には至らなかったが、平成30年5月号には

雪の花睫毛に軽き重さかな
白梅や筆塚あたりまだ蕾
早春や陽のとどまれる石切場
平成30年12月号

長老の来賓席のアロハかな
仏間まで飛び込んでくる黄金虫
嬰兒に滴る母乳野分あと
在りし日や西瓜まるごと仏壇に
令和3年12月号

滝の奥みえて飛沫の輝けり
蜘蛛の囀の三日をまたず完成す
長雨の過ぎれば残暑戻りけり
と、好成績を続けており、真面目で一

生懸命な由美子さんは句会でも熱心。また会計係として、会を支えられている。

今は、元氣になられたご主人との旅行をたのしみにされている由。

令和7年3月号

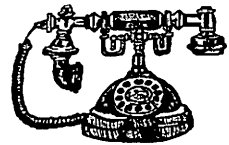
幸せな色を咲かせて冬薔薇
日溜りの枯蠶螂の居場所かな
里山に薪割る音や小六月
ワイナリー巡り小春の温泉郷
令和7年6月号

蠟梅の小径ときをり風尖る
靈園の真青な空を帰雁かな
春しぐれ埃のこして終はりけり
春の風邪皿一枚の洗ひ物
そして待望の巻頭句は

金木犀ポタージュスूपとろとろと
立冬の今朝の日溜り身の内に
舞ひ落つるもの止まざる冬初め
冬に入る地に深深と今朝の雨
良太先生にご報告しましょうね！
活躍を祈っています。

(内田郁代)

万象作品



江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

- 少年の眉極細に青蜜柑 金沢菅原雅子
秋晴や解体すすむ観覧車
終の花の一枝牧師館
コンテナの文字はハンゲルしぐれ虹
○何彼にと物積む納戸十二月 燕 渡辺志ま
新しき軍手始むる冬囲
どさと置く宅配便や日短
初雪や長き籠りのはじまれる
将棋指す音の訝や冬に入る 静岡 杉山巳代
○刃先より香のほとばしる冬林檎
枯蓮ざわと風音残しをり
横顔の光るピアスや冬薔薇
料金を吸ひ込む機器や秋刀魚買ふ 東京 高野翠子
百歳の加はる墓誌や秋日和
新しき靴の踏む地や枯葉鳴る
○窓拭くを鴉見てゐる小六月
阿夫利嶺の晴れて小春や庭いぢり 茅ヶ崎 久保田富士子
○セロリ刈る鎌に香りの残りたり
小走りに猫待つ家路冬三日月
数へ日や古りし時計のねぢを巻き

猫通る風船葛の風の路地 那覇 高嶺容道

石獅子を探す路地裏冬ぬくし

○杖の歩のしづかに沈む冬の草

ビル風の時に柔らに冬薔薇

来賓の祝ひの言葉秋うらら 徳島 林 早苗

ひとり居の昼の雑炊吹きこぼれ

宮の杜杉の大樹に鶺鴒高音

○寄鍋にあれやこれやの米寿かな

足軽く還暦の旅秋日和 札幌 石田 陸

這松にひねもす冬日たつぷりと

鱒の甘めの味噌煮母の味

凍道をペンギン歩き影揺るる 島崎 洋

冬枯の菩提樹並木チターの音

始発バスの乗客一人山眠る

やはらかな冬日に町は包まれて 杉山 和廣

青空へ枝を預けて大冬木

銀杏落葉ちらかす鴉三羽かな

葉一枚閉ぢ込められし蟬氷 杉山 鈴子

○のしかかる空の重さや冬の黙

片足を野面に立てり冬の虹

柳枯れ大枝小枝散らばれり 札幌 竹重富子

冬の日を集めて白き鷺一羽

○子らの声吸うて静かな雪の道

冬の月総菜両手にサラリーマン 田邊 政代

海上の聖樹は街を煌めかせ

熱き餅摺む手水てみずのしぶきかな

電線に群れて声なき寒雀 土門 一平

湯豆腐の昆布の出し汁母の味

悴む手缶コーヒーにじんわりと

決意秘め平積みさるる日記買ふ 土門 一

冬枯の狭庭の松に薄日さす

雪催イマジンを聴くレノンの忌

朝一番出羽富士仰ぐ冬はじめ 新庄 曾野部礼子

初雪や昼には畝の見えはじめ

朝夕に屋根伝ひたる枯葉かな

室外機の音フル稼働寒昴 大江 安藤桂花

秋うらら折紙の角そろへては

花野菜溢れんばかりクリーム煮

暮早しばたばた仕舞ふ俳句会 仙台 富田洋子

隠沼を紅に染めたる散もみぢ

四冊目と決めて十年日記買ふ

○空き部屋をくまなく掃くも年用意 新潟 榊原キヨ子

泊船の四角い窓に冬の月

柿落葉産土神の参道に

○雨音の静かになりて雪模様 齋藤 信

不規則な母の歩幅や冬来る

城のなき石垣残り帰り花

野仏の裾を回れる石露の花 佐藤幸示

隣の黄我が庭は白菊日和

稽田や頂白き八海山 山田季聰

古セーターほどき余生を編み始む

ふんはりと磯に浮かべる波の花

世に遅れ追ひ越せぬまま年新た

大霜に畑の野菜も皆真白 芳賀 稲川清子

朝採りのかぶらの甘きおみおつけ

柿干して紐弓なりの軒の下

銀杏黄葉色出し尽くし散りにけり 福武幸子

「国宝」見るLRTに着ぶくれて

露座仏の光背となる冬の月 ※LRT……次世代型路面電車システム

年毎に陣地広ぐる藤袴 鹿沼 渡辺利子

苺苗の根元に敷ける落葉かな

仄暗き仏間に白の秋明菊 鹿沼 渡辺利子

青空を隙間に置きて冬紅葉

ざつくりと掘り起こされし冬田かな

鈍色のソーラーパネル大枯野

○冷まじや朱の訂正の直訴状 栃木 飯塚キミ

凍蝶の黄色も影も濃くなりぬ

紅白の埠頭のクレイン浜千鳥

白山茶花散る正造の碑の背後 佐野 仲山さよ子

てのひらを素通りしたる雪螢

白鳥の親子寄り添ふ草の上

菊の香や等身大の辻地藏 義本美智江

夕日さす高窓錆びて蔦紅葉

枯葦の畦川覆ひ尽くしたる

ロープウェイ上り詰むれば四方の雪 志木 汐見克彦

修繕の幕巡るビル冬の月

孫の手で肌荒れの背搔く夜更け

肩寄せし防空壕の隙間風 森山洋之助

冬の月風車ゆつくり時刻む

初時雨三年坂で軒を借り

遺されし手帳に予定返り花 千葉 高田みや子

寒林や隣る人みて陽の眩し

再会の間は語りや枇杷の花

小春日や爪痕深き熊本城

草千里大波のごと花薄

五年分夢を詰めこむ日記買ふ

里山や寒暮の空のシルエット 成田

藍から緋空染め上ぐる寒落暉

歩み来し月日の愛し年果つる

沼の晴機影を隠す罌雲 酒々井

改札を雀の通る秋の雨

諸掘の子ら去り紅の残る蔓

○青空の青の深さや棟の実

一面の銀杏黄葉や櫓跡

冬ぬくし牛舎の屋根に鳩群る

古曆胸躍りしもすべて過ぎ 佐倉

施設へと続く垣根の石路の花

霜柱巨きな足の踏みしだく

理髪屋のラジオ聴きぬる十二月

日当りのよさを替められ冬薔薇
ふたつみつ埴輪の里の帰り花

高田みや子

加藤浩子

宮本うらら

小林あけみ

小林あけみ

新谷八郎

有泉正夫

○ご祈祷の長さに欠伸七五三 佐倉 杉田富美代

微風にしな垂れ靡く泡立草

枯葉散る隅に溜まりてまた散りぬ

地の温み空のぬくみや落葉道

水嵩を抱くダム湖や山粧ふ

冬空へ威を誇りたる鬼瓦

ロダン像の膝に真赤な落葉かな

横断歩道黒一色の冬の朝

糖衣錠の瓶に一粒寒き夜

躑とる母の形見や年惜しむ

衣被会話のはづむ句会あと

太陽に軽さを貰ひ布団干す

しばらくは桜吹雪の中にて 船橋

田楽は夫の好物なりしかな

夏落葉あまた隣の公園に

深呼吸出窓に見ゆる冬の星

冬夕焼著く残れる黒き富士

星冴えて腰の痛みを忘れけり

○停車場の枯葉吹き込むエレベーター 柏

栗飯にほくほく顔の遺影かな
雨戸繰る音の静けさ冬の雨

杉田富美代

鈴木隆久

鈴木美根子

米田敏子

近藤澄子

山口秀吉

鹿毛満子

被はれて網をはみ出す蜜柑かな 柏 村田由美子

冬麗の仏間に届く朝日かな

○冬夕焼夜の帳を柿色に 松戸 石川幸子

白鳥や三羽の一羽引き返す 松戸 石川幸子

伸びやかに枝広げをり枯櫛

小春日やほどけし辞書を綴じ始め 菊岡 緋路

この庭の日向日陰に石路の花

闇の中恋歌のごと虫の声

白萩の散りて隣人ゐなくなり 寿多 映子

冬の蝶ふはふは日向先立てり

ダンスする黒きヒジャブや散紅葉 渡部 洋子

○認知検査終へまんまるや冬の月

秋雨のまた降り出せり並木道

団栗を踏む音聴きつバスを待つ 神職 も 巫女も 正装 煤 払

裸木の向かうに見ゆる夕あかね

小六月都電の発車音のどか 東京 安藤美酒々

石庭に注ぐ冬の陽柔らかに

丸丸と固く太れる冬木の芽 大場 八朗

焼山の育てし蕪の色は赤

山形の新米ですかうれしいね

味不足の柿や高温つづきゆゑ

子供らの声賑やかな花野かな 東京 蕪木静子

萩の花背に写りたる笑顔かな

昨日とうつてかはつて肌寒し 北口 富栄

九輪塔へ小暗き小径石路の花

ビル風と凧連れて劇場へ

○路地奥に住み恙なし花八手 齊藤 孝夫

西の市丁丁発止の心付け

大鉄橋の空見上ぐるか冬鷗

○老犬の緩きハーネス落葉径 鶴田 智美

日の差せる母ゐる里の冬座敷

満潮の運河に浮かぶ尾長鴨

セロリ食む渋洪顔の孫二人 中澤 桃子

耳鼻科医院微かに聖歌流れをり

神職も 巫女も 正装 煤 払

○冬日さす宮居の杜の百度石 橋本 紀代子

薄紅の蝦蛄葉仙人掌暮るる

薄原子らの赤白帽子跳ね

大根の葉大きく揺れて土も揺れ

吊られたる鴉ふらふら鳥威し 長谷川 信也

冬菜洗ふ野麦峠の話など

檜山節考見終へ出づれば月夜かな

花八手曇りガラスに映る影 東京 長谷川はるみ

幹割れし銀杏黄葉の御神木

マルチーズコートの胸に抱かれたる

猪おどしぽんと打つたり青き空

まろきまま御代りねだる甕猫

安青錦の大関昇進冬日和

野地蔵に椿一輪供へけり

銀杏落葉しをりとしたる文庫本

縄跳びの回数競ふ姉妹かな

反り返る紅葉の下の真鯉かな

万両のまだ色づかぬ勝手口

○追試験机にのこる木の葉髪

○風紋の砂を飛ばせる神渡し

冬日あまねしお茶室の樽縁に

雪吊の見ゆる書齋に日当たりぬ

風邪心地閉ぢこもりたる二日間

白富士の山ひだ見せて冬の朝

冬の月見上げつ歩く戻り道

寄鍋の湯気の向かうに箸揃ふ

冬浅し灯り始むる川向かう

朝寒の交はす挨拶国訛

平子 甲奈

前川 昇

荒井 仁

高尾 早弓

南場 雅子

竹村 晃子

神宮の落葉散りしく木々の黙 日野 松原悦子

餅搗に力士加はる八丁堀

笹鳴や薬師堂への五百段

秋日和線路見下ろす古き墓

秋祭キッチンカーに人集ふ

いそいそと息子出かける蔵開

蕙紅葉龍の如くに壁を這ふ

秋深し時を忘れて針仕事

鶉の一声ピーヨ置く餌場

冬日差す畳に揺るる木々の影

実南天少し残りて葉の陰に

小夜時雨改札出でて足早に

松の木を登りつめたる蕙紅葉

小蜜柑の甘きを試す庭の隅

猫と犬と続いて逝けり柵咲く

止め石の置かれし庭や朴落葉

○蹲踞に落つる水音石路の花

閑かさや小流れに添ひ落葉掃く

紫陽花の株に一花の蕾かな

夾竹桃白きを仰ぐ庭の奥

凌霄の蔓のたれたる多さかな

青梅 横井一美

横浜 大駒泰子

岡 元枝

加藤 和子

坂本 具子

柴田 雅春

柿一つ残して挽ぐや竿の先

横浜

長野高朋

○論戦の議事堂前の落葉掃く

静岡

海野俊彦

名を捨てて一所専念草の花

月白や家路を急ぐ幼き子

ホウリヤーと女神輿の近づけり

くじ引きの賞品新米バックかな

数珠玉を首からかけて深呼吸

両の手を杖にあづけて返り花

川崎

横山ユキ子

杖の歩の前のめりなる十二月

老友とこの世の電話暮早し

初霜や畑に土塊蹴つてみる

伊勢原

山本カツ子

霜晴の山動くかに色替ふる

堰あふれ鴨の飛び立つしぶきかな

秋の虫うつらうつらのしまひ風呂

松田

古谷悠紀子

再会の肩抱き合へる菊日和

起き抜けの気温一桁石路の花

農小屋に横たふ稲棒色褪する

静岡

飯田優子

穴惑ひ果つやしろがね色放つ

綿虫の留まる仁王の怒髪かな

小春空まあるく包む鳶の笛

勅使門の固き門冬ざるる

伊東文恵

ちやんちやんこの夫ふくふくと達磨めく

雲描く青きカンバス冬うらら

豪華船へ手を振る義父や冬日和

水船の水の抜かるる神無月

目張り寿司頬張り秋を惜しみけり

秋天に薦樽高く伊勢の宮

冬日浴び顔の崩るる羅漢さま

海風を受くる蜜柑の蜜柑色

幼子の銀杏落葉を駆け回る

冬うらら万葉の碑にかくれんば

○櫻落葉パントマイムの背に肩に

指三つ立つるポーズや七五三

妻の留守庭の檸檬に水を撒く

せせらぎに桜紅葉の揺れどほし

マフラーを鼻まで巻くや女学生

社殿より餅まく氏子腕捲り

湖畔道白の際立つ貴船菊

○長靴の泥の重たき大根引き

直角に宮司一礼秋祭

笙の音の響く境内里祭

光りつつ初雪の富士顔を出す

杉田義則

高井明子

高橋一夫

田中秀幸

筑地裕子

内藤允昭

冬ざるる森を貫く廢線路 静岡 中澤祐一

秋高し大仏の御手青空へ 川崎 鈴木裕一

名画座の跡形もなし銀杏枯れ

からからと渦巻となり柿落葉

川崎

スリッパとエプロンの店冬ぬくし

トンネルを出づるやわつと紅葉山

金沢

綿虫の肩に纏はり日の暮るる

常用の葉切れたる夜長かな

上野 富貴子

冬夕焼真白き富士を染めにけり

温め酒と刺身一品至福なり

金沢

冬紅葉ほほ笑む阿弥陀黒光り

鱈汁を合鹿椀にてんこ盛り

能登の漆器椀

壁登る冬蜂風に煽られて

風邪引かぬやう友の手へ庭の柚子

北野 陽子

○バス停に馴染の顔や小六月

野崎 浩子

冬夕焼バスは砂利道直走る

初雪の見ゆる窓からふき掃除

北野

○山茶花を愛で雜貨屋へ試歩の道

長谷川 洋子

冬ぬくし鶯張りを行き来せり

北風に竿のタオルが前回り

新出 祐子

天仰ぐ羅漢の膝へ冬の蠅

なだるるごと降りたる銀杏黄葉かな

北野

石造りの蛙の親子枯葎

矢野喜久江

立冬や隣家のユニボ音立つる

灯籠の苔にも黄葉紅葉かな

北野

軒下に婆の手製の吊し柿

海見ゆる小春の丘に鶯の笛

北野

笑ふたび涙の出づる日向ほこ

焼津 小梁 洋子

なほ紅く夕日とらふる冬紅葉

侘助の真白に朝日弾けたり

北野

鶏すきが好きでひとりも良かりけり

不揃ひの先のはねたる干大根

北野

口開けて笑ふ羅漢や冬うらら

掛川 鈴木美由紀

紺碧の空に吸はるる渡り鳥

○石臼の転がるやうに冬の雷

北野

「おつかれさん」のど飴貰ふ冬ぬくし

送迎の車窓に柿のたわわなる

北野

色も香も十分満ちて金木犀

北野

軽やかな木魚のリズム十二月

北野

張りかふる書院の障子朝日射す

北野

あさつては雪の予報や膝の猫

北野

宮崎 恵美

廣田 宏美

田上 ナツ子

鳥も来ず静かなる庭冬に入る かほく 能任康子

凧の夜のお話「ごんぎつね」

若者の肢体伸びやか冬日和

赤とんぼ寄らず離れず路地の角 白山 朝倉みゆき

連れ立ちてメタセコイアの黄葉道

枇杷の花あふるることく香りたつ

冬天や鴉は赤き実をこぼし 鶴尾正江

のほり来る満月雲を従へて

笹鳴きの馴れたる声よ藪の中

若狭路に名水湧きて山眠る 敦賀 川口和代

チエロの音の余韻の帰路や冬銀河

欄間越し日のうすうすと白障子

びよんぴよんと石庭駆くる三十三才 奈良 町田すみれ

勢子縄を鹿の逃げ出す勢かな

冬の蝶日向を求めさまよへり

もてなしのスリッパ二足冬用意 徳島 山本晴美

湯の町へ相乗り吟行薄紅葉

冬の薔薇うつかり苔切り落とす

鱗雲北斎ブルーの空うづむ 山本瑤子

冬満月雲のヴェールの狭間より

紅葉寺紀貫之の碑をなぞる

木枯や動かぬ雲と走る雲 小松島 田上幸子

○渦のぞく奈落の底の寒さかな

渋柿むく姉妹右利き左利き

寒の雨言葉を添へて回覧板 福岡 園田清子

しぐるるや休耕田より鳥立てる

冬夕焼旅の終りの博多湾

幸願ふ艶やかなりし仏手柑 鶴田輝代

出来たてのぬた場に転ぶ花梨の実

返り花遺影の父の笑顔かな

発掘の白磁青磁や豊の秋 太宰府 美山留唯

御会式のうちは太鼓の練り歩く

寡黙なる庭師の呉るる甘藷かな

夜なべしてチロルの衣裳縫ひ上ぐる 那珂川 高山ひさ子

大根干す太き青首六つ割りに

○ロボットの運ぶ海老チリ小六月

横切りて千鳥尾羽でリズムとる 門川 請関ゆかり

冬晴や鳶悠々と日向灘

風邪に伏す耳にけんかの猫の声

手を止めて見上ぐる木の実時雨かな 回富 山口孝治

団栗のビニール袋踏まれけり

艶やかに団栗三個幼の手

妻齧る娘の齧る冬林檎 那那 稲嶺有晃

マラソンに那覇の師走の暑さかな

実印へ朱肉の粘り虎落笛

ふるさとは冬晴風の福木路地

岬まで道真つ直ぐに甘蔗穂波

○首里杜に風立つ気配笹子鳴く

植込みに魔法の杖やハロウイン

秋暁の坂少年はペダル漕ぐ

本棚に「暮しの手帖」冬に入る

巡礼宿になびく白衣や山眠る

寒風や大歩危小歩危てふ山峡

冬風の瀬戸の千島へ渡し船

大城末治

宜野

頭

舞

森尾

舞

舞

舞

舞

舞

舞

舞

今後の新中央句会の予定

▽3月例会 都合により、通信句会とします。

3月20日までに、幹事(久留島規子)宛、一人4句を投句

〒168-0071 東京都杉並区高井戸西2-18-1107

Mail: norikokurushima@hotmail.com

Tel: 0800-1267-9113

(郵送又はメールで、可又は不可)

▽4月26日(日) 東京文化会館 大会議室 13時より

俳句

3月号 予告

2月25日発売

巻頭作品50句 宮坂静生
作品21句 若井新一・岩岡中正

予価1,100円(本体1,000円)®

特集

時代別 春の名句一〇〇選

〔はじめに〕春の名句の魅力
〔鑑賞〕近世・明治・大正の名句／昭和の名句／平成・令和の名句
〔おさらい〕定番季語の本意／知っておきたい季語

第14回 星野立子賞

星野立子新人賞発表

選考委員評／受賞のことは／受賞作抄

句集特集 山田真砂年『夜は昔の』

好評連載
はみ出せ! 俳句……………夏井いつき
小林秀雄の眼と俳句……………青木亮人
飯田龍太の世界……………廣瀬悦哉

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(https://bookwalker.jp/) など電子書店で購入できます。
発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA https://www.kadokawa.co.jp/



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所にニクツキ(月)の漢字を入れましょう。

- 1 一家に遊女もねたり萩と□ 松尾芭蕉
- 2 □天心貧しき町を通りけり 与謝蕪村
- 3 岩鼻やここにもひとり□の客 向井去来
- 4 秋風やひゞの入りたる□の袋 夏目漱石
- 5 蜥蜴照り□ひこひことひかり吸ふ 山口誓子
- 6 □運ぶ長き袂や風の盆 細見綾子
- 7 朴若葉□蔵界の風吹けり 沢木欣一
- 8 □こりの□葉匂ふ一葉忌 内海良太
- 9 しんしんと□蒼きまで海の旅 篠原鳳作
- 10 □梅の薄き日ざしのままに暮れ 鷹羽狩行
- 11 子規逝きし夜の□明と眺め入る 飛高隆夫
- 12 かの蛇の長さ示すに□足らぬ 池田澄子

【正解】

- 1 月
- 2 月
- 3 月
- 4 胃
- 5 肺
- 6 膳
- 7 胎
- 8 肩・背
- 9 肺
- 10 臘
- 11 月
- 12 腕

おいしい俳句

第13回 嵐山光三郎

木がらしや目刺にのこる海の色 芥川龍之介

御存知、芥川の名句。目刺に残っている海の色を見つめてゐる。「木がらしや東京の日のありどころ」もい。大正五年、二十四歳のときに書いた小説『鼻』が漱石の激賞を受けたが、漱石が同年十二月に没した。三十歳のころ四畳半の香齋を「澄江堂」とし、句作をはじめた。芥川の句には背景に物語がある。三十一歳で関東大震災に遭い、「炎天にあがりて消えぬ箕のほこり」。倒壊した市街を見てまわり、古美術や古書の焼失を惜しんだ。

そのころ「自嘲」と前書をつけ「水漬や鼻の先だけ暮れ残る」と詠んだ。「鼻の先だけ」の「中七」には漱石にほめられた小説『鼻』への思いが重なる。芥川は自殺の前にこの句を下島勲に示した。「文藝春秋」に書いた「朱儒の言葉」に「ぼくの精神的な生活は滅多にちゃんと歩いたことはない。いつも蚤のように跳ねるだけである」と述べた。精神科医の斎藤茂吉に「透明なる歯車あまた右の目の視線に回転することあり」と発狂の恐怖を訴えた。昭和二年七月二十三日深夜、「続西方の人」を脱稿し、翌朝未明、田端の自宅で自殺。享年三十五。命日の七月二十四日は「河童忌」。

公葬社団法人俳人協会

万象作品の佳句

江見悦子

少年の眉極細に青蜜柑 金沢 菅原雅子

最近の若い男性は髪形ばかりか美顔等にも気を使うようで、混んだ通勤電車の中でも、体臭や汗臭さを感じる事が殆どなくなつた。掲句の少年も、眉の形に凝つて極細の眉を形作つている。柳眉という言葉は女性だけの物ではなくなつたらしい。季語は「青蜜柑」、青く酸っぱい蜜柑である。これから大人になつていこうとしている少年の姿と通い合う。

何彼にと物積む納戸十二月 燕 渡辺志ま

12月の声を聞くと何かと気忙しく、気にかかつていた物の片付けに取り掛かつたりする。あれやこれやと始めてみるものなかなか整理が付かず、中途でまとめて納戸に持ち込んで終わりにしてしまふ。これで新年を迎えられないわけでないし、と自分に言い訳できるのも年の功。思わずくすりとさせられる俳味のある句。

刃先より香のほとばしる冬林檎 静岡 杉山巳代

冬林檎にナイフを入れた瞬間の香り、それを「香のほとばしる」と表現した。瑞々しく清らかな汁も飛んだに違いない。「刃先より」と的確に捉えた。冬林檎の赤と果肉の白の色彩も目に浮かぶ。嗅覚と手に感じた触覚、一瞬の驚きを詠んだ実感のある句。

窓拭くを鴉見てゐる小六月 東京 高野翠子

穏やかな小六月の一日、好天氣に誘われて窓拭きをしている人物。その姿を見ているかのような鴉、そしてその情景を眺めている作者がいる。遠近法の絵のような面白い捉え方だ。いかにも小春日にふさわしい句になつた。

セロリ刈る鎌に香りの残りたり 茅ヶ崎 久保田富子

使い慣れた愛用の鎌でセロリの株を刈つて畑から戻り、鎌を片付けている時にまたふつとセロリの香りが立つた。セロリの爽やかな香に溢れている感覚的な句。

杖の歩のしづかに沈む冬の草 那覇 高嶺容道

杖を突いて冬の野原を歩いている作者、ふつと足元が草に沈んでいくように感じた。周囲が鎮まり、一瞬自分一人の世界に浸つた作者。「しづかに沈む」に境地の深まりがある。

寄鍋にあれやこれやの米寿かな 徳島 林 早苗

米寿を迎えたお祝いの席、家族が集まつて寄鍋を囲んでいる。食卓には魚やら肉やら野菜やら、米寿のご本人も準備に余念がない。鍋奉行は誰なのか、あれもこれもと具材が増え、おしゃべりも加わつて賑やかなことこの上ない。米寿を迎えられた心の弾みは、元氣あればこそである。

子らの声吸うて静かな雪の道 札幌 竹重富子

子どもたちが遊びながら雪道を通り過ぎていったあとに、元のたつぷりと雪の積もつた道が戻つてきた。静かな雪道である。「吸うて」の措辞が良い。

冷まじや朱の訂正の直訴状 栃木 飯塚キミ

「直訴状」という徒ならない言葉に驚いた。幕末から明治

にかけての村名主、政治家であり社会運動家の田中正造の「直訴状」を目にしたのだらう。日本初の公害事件と言われる足尾鉾毒事件に生涯をかけて取り組んだ正造は、最後の策として、明治34年天皇の馬車に向かって直訴状を掲げて突進した。幸徳秋水が草稿を書き正造が朱を入れたものを、佐野市郷土博物館で見ることが出来る。それを前にしての感慨を作者は「冷まじ」の季語で表した。訂正の朱の文字と朱の訂正印が押された直訴状を眼前にした作者、季語が動かない。

青空の青の深さや棟の実 酒々井 小林あけみ

「棟（＝梅檀）の実」は青実から始まり、枝が次々に落ちる中に熟れ、順に乾いて長い間残っている。「青の深さ」と詠んだ青空の下、棟の実が鮮やか。印象鮮明な句である。

停車場の枯葉吹き込むエレベーター 柏 鹿毛満子

停車場とは古い表現だが、乗客の少なくなった駅なのだらう。そんな駅にもエレベーターが設けられ、扉が開くたびに枯葉が風と共に吹き込んでくる。一瞬の発見、驚きの句。停車場とエレベーターの、思いがけない新旧の取合せも面白い。

老犬の緩きハーネス落葉径 東京 齊藤孝夫

「ハーネス」とは犬の胴体に装着する牽引具のこと。引綱（リード）をつけられて散歩するペットの姿をよく見かける。「緩きハーネス」とは、老犬の負担を軽くしようと緩めにつけたのだらう。落葉が敷いたいつもの散歩道を、犬の歩調に合わせてゆっくりと散歩する場面を想像した。

論戦の議事堂前の落葉掻く 静岡 海野俊彦

「論戦の議事堂前」が面白い。議事堂の中では熱い論議が

続いているのだらうが、門衛の立つ正門前の落葉は毎日掃かねばならない。淡々と落葉を掃く人の姿と議員たちの姿の隔絶を暗示した社会性のある句。

櫻落葉バントマイムの背に肩に 静岡 高橋一夫

公園の大道芸のバントマイムに行き当たった作者。櫻大樹の下、赤い鼻をつけた道化師の背にも肩にも櫻落葉が舞い落ちてくる。見物の子供たちの目の輝き、お年寄り、若者のカップルにも櫻落葉が。晩秋の休日の雰囲気が楽しい。

石臼の転がるやうに冬の雷 金沢 廣田宏美

「石臼の転がるやうに」とした直喩表現に驚いた。北陸の冬の雷は、地を轟かすような音なのか。能登半島にも響きわたったに違いない。長く厳しい北国の冬が始まる。

渦のぞく奈落の底の寒さかな 小松島 田上幸子

徳島県の田上さんの句であってみれば、この渦は鳴門の渦潮だらう。渦巻く海面から45mの高さに大鳴門橋遊歩道が架けられている。そのガラスの床から、渦潮をのぞきこんだ時の身の冷える感覚を「奈落の底の寒さ」と表現した。季語「寒さ」の生きた、実感に満ちた句である。

首里杜に風立つ気配笹子鳴く 那覇 大城末治

「首里杜」は沖縄語で、「スィムイ」、首里城の別称である。沖縄の歴史・文化を象徴する城だ。令和元年10月31日に火災で正殿が焼失したが、今年の秋には再建が成るといふ。掲句の「風立つ気配」とは作者の感じた幽かな気配なのだ。そこに鶯の地鳴きを聞いた作者。来るべき新しい季節を待ち受け、明るい予感を感じた。

かつては故野崎ゆり香主宰の「堅香子」を中心として活発な活動を展開した埼玉でしたが、野崎主宰の地元である紙漉の里として知られる小川の句会や、故原田しずえ先生の率いた小江戸・川越の句会がご多分に洩れぬ高齢化の中で姿を消してゆく中、現在では故飛高隆夫の流れを汲む「浦和句会」だけが残ることとなりました。

「浦和句会」は当初、野崎ゆり香が指導したもので、そこには飛高隆夫をはじめ、大宮の句会をまとめていた石川矢や幹事を務めた鷲尾不群といった古参の同人が参加していました。そうした有力同人も時と共に鬼籍に入り、飛高先生が亡くなられた後は、句会を開いていた「市民会館うらわ」も改築工事に伴って閉鎖。コロナ禍の中で一時はオンラインとなった句会でしたが、現在では欠席投句者を含めた小人数での句会として継続しています。そんな現有メンバーから、四名の声を紹介します。

「下五は、日向ほこより小春かなにすると動きが出ませんか？」そんな意見が出て、私の句は（靴下を脱いであんの小春かな）になりました。このように浦和句会では一つひとつの句について感想や意見を述べ合いながら、そうした時間を皆で

楽しんでおります。一度お出かけください。（幹事・砂地宏子）

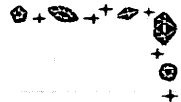
俳句を始めたきっかけは、家庭も落ち着いた頃、同窓会の俳句会に参加したことから。挫けそうになりながらもこまめ続けられたのは、飛高先生や千久さんの長い目でのご指導のお陰と感謝致しております。「とにかく、作ってみる事」「迷わず写生を続ける事」とのお言葉を忘れずに、実作を積み重ねていきたいと思っています。（岡村純子）

浦和句会といっても埼玉県ではなく、東京の千代田区三番町にある女子大の教室で句会を開いています。三番町は大変地価が高いので有名です。そのため借りている大学のゼミ室の賃料の負担がきつく、もう少し句会の会員が増えて欲しいと、会計の私は切望しています。（桑原優美子）

私はまだ俳句を始めたばかりのころ、飛高隆夫先生が冬至生まれであることを嬉しそうに話されたことを覚えています。俳句を続ける中で、寒さの中どこか励まされるような冬至のイメージと飛高先生が合っているなと感じることがよくあり、今も冬至には懐かしく先生を思い出します。（三村紀子）



ルビーの小函 (3月号)



「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったものの中から、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- | | |
|----------------|------------------|
| 8 桴(ばち) | 23 岨路(そわじ) |
| 9 首級(しるし) | 爽籟(そうらい) |
| 巾箱本(きんさんぼん) | 瓢(ふくべ) |
| 11 木苺豆(きささげ) | 24 大噓(おおくさめ) |
| 正信偈(しょうしんげ) | 疎らに(まばらに) |
| 12 胃瘵食(いろうしょく) | 25 潜く(かずく) |
| 清拭(せいしき) | 26 屯(たむろ) |
| 氣嵐(けあらし) | 神馬(じんめ・しんめ) |
| 13 考(こう)*亡父のこと | 繕けり(ひもとけり) |
| 榭紅葉(はぜもみじ) | 27 鞞(あかぎれ) |
| 泛ぶ(うかぶ) | 28 解けゆく(ほどけゆく) |
| 過る(よぎる) | 29 木偶(でく) |
| 14 篁(たかむら) | 30 疊紙(たとうがみ) |
| 16 鬼太鼓(おんでこ) | 46 鱗(はたはた) |
| 出石蕎麦(いずしそば) | 寒鼎(かんすばる) |
| 皂角子の実(さいかちのみ) | 隠沼(こもりぬ) |
| 樫(ゆずりは) | 47 穉田(ひつじだ) |
| 礁(いくり) | 冷まじ(すさまじ) |
| 呷る(あおる) | 48 愛し(いとし) |
| 在す(おわす) | 衣被(きぬかつぎ) |
| 17 尉鶴(じょうびたき) | 49 帳(とばり) |
| 捻子(ねじ) | 蝦蛄葉仙人掌(じゃこぼさぼてん) |
| 18 梢(うれ・すえ) | 50 樽縁(くれえん) |
| 乾門(いぬいもん) | 51 薦櫛(こもだる) |
| 冬青の実(そよごのみ) | 52 直走る(ひたはしる) |
| 粗目(ざらめ) | 合鹿碗(ごうろくわん) |
| 19 八卦見(はっけみ) | 53 三十三才(みそさざい) |
| 20 藜砧(わらきぬた) | 勢(きおい) |
| 寒柝(かんたく) | 御会式(おえしき) |
| 21 著き(しるき) | 54 甘藷(きび) |
| 23 産土神(うぶすな) | 大歩危小歩危(おおほけこほけ) |
| 郁子(むべ) | *徳島県の景勝地 |

北 南 西 東

消息等

江見悦子主宰の句

「くぢら」 1月号に

寝足らひし朝こぼるる松の露

「たかんな」 1月号に

赤松の風ゆるやかに籐寝椅子

「初蝶」 1月号に

広島忌水瓶にみずあふれしめ

「なると」 1月号に

なると五十年

江見悦子鷹の渡りの空仰ぐ 福島せいぎ

第24回宮若全国俳句大会 入選句

金婚や宇佐神宮の冬桜 福岡 園田清子

「季節風」秋の吟行句会

11月30日「季節風」秋の吟行句会が静岡

市清水区の小島陣屋跡、清見寺、坐漁荘等

を廻り19名参加で行われた。

鐘楼に観る冬風の清見湯 田中秀幸

冬ざれや目鼻薄れし羅漢さま 海野俊彦

禅寺に石の声して冬深し 望月敏男

勅使門潜れば燃ゆる冬紅葉 本多ひとみ

石段の一步を照らす石路の花 石川裕子

閉ざされし宮の土俵や藪柑子 藤本節子

葺き立ての杉皮の堀避寒宿 小川明美

底抜けの冬青空や陣屋跡 荻野加壽子

陣屋跡大根の太る石の畑 藤原千代子

冬ざれや寺にか黒き血天井 神田美穂子

第25回たんば青春俳句祭 入選句

朝妻 力 選

綾子忌や零さぬやうに米を研ぎ 荻野加壽子

根分けせし牡丹に雨や綾子の忌 神田美穂子

石川県支部あかね句会初句会

1月8日あかね句会の初句会を行った。

新しい参加者を迎え総勢25名。全員投句、

互選・披講・選評と気持ちの良い緊張感の

中で句会を終える。その後、レストランで

和やかに新年会を開催。今年もあかね句会

で切磋琢磨しましょうと誓い合った。全員

で「早春賦」と「ふるさと」を合唱してお

開きになった。

(成瀬真紀子)

高 点 句

青青と大注連縄の香を潜る 清水英理子

白鳥の暮色 遠嶺の夕茜 成瀬真紀子

狼犬の風の動きを聴きあたり 南 恵子

愚痴聴くも聴かすも親子みかん刺く 伊藤美音子

あらたまの風突つきつて鶴の声 中條睦子

薄氷や風の息吹を閉ぢ込めり 豊田高子

万象北海道新年初句会

札幌・北・円山三句会合同の初句会を1

月10日、かでの2・7にて開催、参加者19

名。(林 陽子)

高 点 句

冬木の秀空の不思議を見てあたり

小さき手も鈴の緒振れり初詣 杉山鈴子

太古より空映す湖去年今年 太田佳美

一人ひとり誰をも照らす初日かな 岡本敬子

初日さすのぼり切つたる男坂 佐藤麻利子

寒林の影の触れ合ふ絆かな 島 泰

鮮魚屋の木箱重ねて初商 中鉢弘一

お降りの大地清むる白さかな 落合裕子

初御空高く低くと鶯の舞 林 陽子

騒々と波が波押す冬的大海 小島良夫

初夢の父は吾より若かりき 松原智津子

柳澤宗正さん米寿記念出版句集

「遠富士」刊行

我が家の居間より眼前に広がる横浜市街

の遙か西に、箱根の山々と丹沢山塊を左右

に從えるように聳える富士山。四季折々、

この遠富士を眺めて暮らしている。遠富士

や富士山の句が幾つもあつた所以である。(あ

とがきより抜粋)

遠富士や伸び縮みして鳥渡る

阿夫利嶺の雲のちぎれて神渡し

海に出て揉まるるばかり花筏

(報・編集部)

064-0808

札幌市中央区

南八条西15-1-5-904

万象作品投句係行

110円切手を
貼ってください

氏名	住所

〈通信欄〉

編集後記

▽4月号でもお知らせ致しますが、「万象」誌の校正でご尽力いただいた下嶽孝一さん（東京）が年明けに急逝されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

昨年来、編集部では小池さん、砂地さん、挙句の果てに千久と、たて続けに病魔に襲われ、お祓いでも思っていた矢先の出来事でした。皆さまも、くれぐれもご自愛くださいませよう。

急遽、担当者の編成替えを致しました。校正担当には、3月から古川京子さん（千葉）、4月からさらに成瀬真紀子さん（富山）にご協力をいただきましたことになりました。

又、これに伴い万象作品の投句葉書の送付先が、林陽子さん（北海道）に変更となり、2月号から巻末の葉書の宛先を変えております。（千久）

▽3月は桜の季節、温暖な静岡では、1月に熱海桜が咲き、続いて河津桜が咲く。どちらも色が濃く観光客が多く

訪れ目を楽しませてくれる。河津桜の近くに涅槃堂がある。普段は無人だが、2月中は一般公開している。日本三大寝釈迦仏とされ、必見である。（美穂子）

▽1月も半ば過ぎ、散歩の途中小さな神社へ立ち寄ると白梅が咲いていた。静かな境内に楚々と。気が付くと近所の庭の一本もほつぽつと白い。寒中の花とその香はとりわけうれしい。こうして桜に変わるまで、早梅、野梅、紅梅、老梅、枝垂梅……と楽しませてくれる。（二もとの梅に遅速を愛すかな

蕪村）。蕪村といえは梅が好きで、たくさんの梅の句を詠んでおり、（し）ら梅に明る夜ばかりとなり（けり）を辞世の句とした。（明子）

▽高齢に伴い人生終活の句が多くなる。倍賞千恵子演ずる85歳の終活ドラマを東京・柴又から神奈川・葉山にある高齢者施設までタクシーで送る運転手との出会いから始まる。山田洋次監督の最新作「TO K Y Oタクシー」は終活に一石を投ずる。（孝一）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分 一、二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万象 三月号

第二十四巻 第十二号

通巻 第二八八号

令和八年三月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一-三-16-1603

万象発行所

☎〇三六三三四一五七九六

「万象」創刊二十五周年記念

第二十四回「万象俳句賞」作品募集

万象俳句賞は毎年一回広く作品を募り優秀作を表彰、「万象」俳句の向上・発展に資するものです。多数の応募を期待いたします。

作品 一人20句 未発表新作に限る

原稿用紙など一枚に縦書きとし、一通（コピー可）提出

原稿の冒頭に題名を、末尾に住所・姓号を明記

封筒に「万象俳句賞応募」と朱書のこと

メールでの応募の場合は、応募原稿と必要事項を添付してお送りください

選者

江見 悦子 小林 愛子 中村 千久 福島せいぎ 柳澤 宗正

中條 睦子 前田貴美子 榎本 文代 神田美穂子 沢辺たけし

応募資格

「万象」同人・会員に限る

締切

令和8年6月末日到着分までを有効とする

宛先

〒二七〇一〇一六 千葉県流山市中野久木五六三一一

穂苺 照子（万象俳句賞事務局）

〈メール〉6845ubwn@jcom.zaq.ne.jp 〈電話〉〇九〇一二四二七一一七五

入賞発表

「万象」10月号 全国俳句大会で作品一席に万象俳句賞を贈る